
「幼なじみ」

ぴよこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「幼なじみ」

【Nコード】

N3881Z

【作者名】

びよこ

【あらすじ】

「…逃げてみるか？」

肩越しに見える天井の色と、色素の薄い髪の色がやけに美しいコントラストを描く。見慣れた彼の部屋、…ベッドの上。そう言って、綺麗な顔が笑った。

「幼なじみ」の紗衣みえと宥斗ゆと。ある夜をきっかけに、ふたりの関係は変化していく。このままずっと、傍にいられる…？

No.1 (前書き)

初投稿です。

ベッタベタの王道ストーリー。

行き当たりばったり。8割方話は書けていますが、最初のプロットと全く違う展開になったりしていて、ビックリですw

少しずつでも、なるべく期間を開けずに投稿していきたいと思います。12月中には完結させたいです。

よろしく願います。

No. 1

「…逃げてみるか？」

肩越しに見える天井の色と、
色素の薄い髪の色がやけに美しいコントラストを描く。

見慣れた彼の部屋、
…ベッドの上。

そう言って、
綺麗な顔が笑った。

私達は、お互い出会いの頃を覚えていない。
そんな事は、思い出せないくらいずっと昔の記憶なのだ。

産まれた時からいつも一緒。
私にも宥斗にも兄がいるが、年が離れているため、小さい頃は常に宥斗と行動を共にしていた。

私が母のお腹にいるところに新築で家を建て、先にこの家に住んでいたところ、2ヶ月あけて隣に越してきたのが宥斗達家族だった。

上の兄同士も同い年、下のお腹の赤ちゃんも同い年、しかも予定日まで同じ、とくれば、母親達はすぐに意気投合したようだ。

現に、今でも大の仲良しでしょちゅう父親たちを置いてシヨッピングだの、旅行だの、ふたりで出かけ回っている。

お互い両親が共働きなので、私が高校生になった頃、両家の夕食の準備を買って出た。

最初は「大変だろうから、やらなくていいよ」と諭されていたが、始めたことはなかなか辞められない性分なのを両親ともによく分かっている、今では毎日の日課となっている。

母親の仕事が終わるのが早い日や、休みの日などはちゃんと作ってくれるし、品数は一緒なのだから量が多いだけで、食事の準備は全く苦じゃない。

料理は小さい頃から大好きだ。

それを夕飯時になると宥斗の家に届けに行く。

兄たちはとっくに家を出て自活しているので、ふたりで夕飯を食べ

る。

宥斗が後片付けをしてくれて、後はテレビを見たり、宥斗の部屋でゲームをしたりして一緒に過ごす。

進路も決まった高校3年の冬、バイトも部活もしていない私たちは、お互い友達との予定がない限り、夜はふたりで過ごしていた。

いつもと同じ、夜はずだった。

No.2

「紗衣チズ！ちゃんとタイミング合わせろよ！」

「あ、合わせてるよ！あれっ!？」

その日の夜は、このところハマっているゲームをしていた。

ふたりで協力しながら先に進んでいかなきゃいけない、迷路のゲーム。

対戦ものだと宥斗のひとり勝ちになってつまらない、と言ったら宥斗が買ってきてくれたゲームだった。

「あ〜〜!?!」

私が叫び声をあげて、ゲームオーバー。

「やっぱ紗衣には難しかったか…。もっと簡単なやつじゃねえとダメだな」

「まだ慣れてないだけだもん!?!」
ムキになって言い返せば、宥斗は優しく笑う。

ドキンッ

顔が赤くなる前に、急いで言葉を紡ぐ。

「もう一回……！」

「おーし。早く慣れるよな〜」

最近の宥斗はこんな風に優しく微笑むことが多くなった。

思春期特有の、仲がいいとからかわれる、なんて時期もとくに過ぎた。今では学校中の人が、私達の間係を知っている。

ふたりでいると、付き合っているのかと質問されることもよくあったけれど、私達はいつも同じ返答をしていた。

「幼なじみ」だと。

宥斗は中性的な顔立ちをしていて、手足がものすごい長い。

身体のバランスがいいからか、175センチくらいしかないはずの身長はもっと高く見える。

小さい頃から綺麗な顔をしていただけ、高校生になった頃から男らしさも加わって、女の子に声を掛けられることも増えた。

けれど、女の子に対しての愛想をお母さんのお腹の中に起き忘れてきてしまったのか、応対がそっけなくて、そこがまた競争率をあげる原因となっているらしい。

毎日登下校を共にしている私も、入学当初、嫌がらせを受けたこと

もあつたけれど、友達と宥斗が一喝してくれて、それ以来あからさまな攻撃は受けていない。

でも、「幼なじみ」だから、隣にすることを許されたような気がして、なんだか変な気分だった。

その時、自分は宥斗のことが好きなんだと気付いた。

「幼なじみ」じゃなくて、「彼女」として宥斗の隣にいたい。

宥斗にも、私のことを「女」として見て欲しい。

友達には告白するようにすすめられるけど、失敗して、「幼なじみ」としてすら宥斗といられなくなるのはイヤで、なかなか踏み出せない。

この関係を崩すのが怖い。

でも、やっぱり好き。

宥斗の優しい笑顔を見るたびに、たまらなく胸が苦しくなる。

「うわ、もうゲームはじめて2時間もたつよ」

「あー喉乾いたなあ。紗衣も何か飲む？」

「飲むー」

なんか持ってくる、と宥斗が部屋を出て行く。

時刻は午後10時。

そろそろ帰ろう、と思いながらゲームを片付けていると宥斗が戻ってくる。

「早くない？」

「俺、紗衣と違って足長いから」

笑いながら片足を上げて、足首をひらひらさせながら言う。

冗談だろうけど、事実なのがムカつく。

「いただきまーす」

「無視かよ」

ベッドに座って、宥斗の持ってきた缶ジュースを飲む。

甘い。

ジュースを飲み始めた私を見て、ベッドの横にある勉強机の椅子に宥斗も座る。

「あ」

「なんだよ」

「そういえば、みのりがね、日曜日に、みのりの彼氏と、その友達と、あと女の子何人かでカラオケに行くらしいんだけど。今日誘われたんだ」

「ふーん…」

机に頬ずえをついて、宥斗がこちらを見る。

ん？機嫌悪い？

「で？」

「え？」

「行くの？」

あからさまに、イヤそうな声。

何年一緒にいても、宥斗の怒った顔は怖い。

怒っている理由がわからないので、そのぶん余計に怖く感じた。

「うーん、まだ決めてないけど、みのりがもし参加するなら、宥斗の許可とってからにしるって言うから」

内心怯えているのを、極力顔にださないように心掛けて答える。

親友であるみのりに誘われた時、「絶対に宥斗の許可を取るように」

と念をおされた。

別に男の子とふたりだけで出かけるわけでもないし、付き合ってるわけじゃないんだから、聞く必要もないと思ったが、みのりにしつこく言われたので、一応話してみた。

…言わなきゃよかったかな。

「それ合コンだろ？」

言って、持っていたジュースを飲み干しす。それから乱暴に左耳を掻いた。

ああ、イライラしてる。

宥斗はイライラすると耳に触る癖がある。

…て

え！？

「え！？合コンなの！？」

あまりにもびっくりして、持っていたジュースを落とすそうになった。

危ない、危ない。

「顔も知らない男と女が何人かずつで集まったら、そりゃ立派な合コンだろ」

呆れたような声で言われてから、その法則はいかなものかと思っ
たが、黙っておく。

「あゝなるほど〜…。」

「なんで気づかねんだよ。紗衣はホントにアホだな」

「アホって！！だってみのり、合コンなんて言わなかったもん！！
だいたい宥斗だって、女の子交えて出かけたことくらいあるでしょ
う！？」

話してて、自分でもよくわけがわからなくなってきた。

なんでこんなことで言い合いしてるんだ。

でも、宥斗だって女の子を交えた大人数で出かけてるのに、なんで
自分だけアホ呼ばわりされなきゃいけないの。

それだって、宥斗の言う法則で言ったら合コンじゃない！！

「俺のは合コンじゃないだろ。最初からわかってたら行かないし。
まあ明らかそれっぽくなった時は、さっさと帰ってくる」

宥斗が飲み終えたジュースをゴミ箱に投げる。

ナイツシュー

って違う！！！！！！

「私だつて、明らかそれっぽくなったらさすがにわかるもん！」
「いやいや。紗衣は誘われてるのにも気付かないまま付いていくだ
ろ」

「…っ！もしそうなくても、さっさと帰ってくればいいんでしょ！
？」

もう売り言葉に買い言葉だ。

私はベッドにある枕を、宥斗めがけて投げつける。

「…できんの？」

うまいこと片手で枕を受け止めた宥斗が、近年稀に見る怖い顔でつぶやく。

馬鹿にして…！！

「できるよ…！！」

瞬間、宥斗が勢いよく椅子から立ち上がる。

え、と思っっているヒマもなく、両手首を掴まれると、視界が突然動いた。
ベッドに背をつくくと、ぼふっと、なんとも間抜けな効果音が響き渡る。

そのままベッドに縫い付けるように手首に力をこめられた。

気が付くと、宥斗の肩こしに天井を見上げていた。

「紗衣」

私を呼ぶ、声がする。

こんな風に、宥斗に呼ばれたことなんてない。

握られている手首が、かすかに痛む。

「…逃げてみるか？」

真っ直ぐ私を見下ろす宥斗が不適に笑った。

一瞬のうちに、自分の顔が真っ赤に染まっていくのがわかった。

目も、こんなに見開いたの初めてじゃないだろうか。

この目は私の目で、これは私に起こった現実の出来事なのに、まるで映画をみているような不思議な感覚だった。

何も言えずに固まっていると、ふっと、いつもの優しい笑みを浮かべた顔がどンドン近付いてくる。

まばたきさえも忘れた私は、人形のように固まってその様子を見ていた。

唇が触れ合うかと思うほどに近付いて、宥斗は一度動き止める。

ああ、やっぱり宥斗は、なんて綺麗な顔をしているんだろう。

なんて、その場で考えるにふさわしくない事を考えてから、はっと我にかえる。

え!?

お、おお押し倒されてるう〜〜!?

声にならない驚きで口をパクパクさせると、それを見ていた宥斗が吹き出した。

「ぶはっ」

そのまま顔を私の右側によけて、宥斗もベッドに倒れこむ。

手はまだ、掴まれたままだった。

顔をベッドにふせたまま、笑いの止まらない宥斗に呆然とする。

しばらく笑って気が済んだのか、手がほどかれ、向き合うように体を引っ張られる。

ゴロンっと転がると、綺麗な顔が目の前にあって、驚いて体を離そうとすると、今度は宥斗の右手に肩を引き寄せられて、すっぽりと覆われる。

近い〜!!

近いって〜!!!!!!

状況についていけないアワアワした私を見て、もう一度微笑むと、

そのあと、切なく顔をしかめて言った。

「俺の、目の届く範囲にいてくれよ……」

そのまま頭を下げて私の視界はふさがれる。

「うん……」

それ以外の答えを、私は持ち合わせていなかった。

No. 4

日曜日。

昨日の夜はなかなか眠れなかったのに、もう目が覚めてしまった。

まだ空の色が薄暗いことから平日の起床時間よりも、はるかに早いことがわかる。

「まだ5時半か…」

ベッドの枕元にある目覚まし時計を見て呟く。

あのもと、どうやって自分の家に帰ってきたか、覚えていない。

気が付いたら自分の部屋にいて、ベッドの上だった。

何度も何度も、あの時の、切なく微笑む宥斗の顔が脳内を巡る。

それだけでまた顔が真っ赤に染まっていくのがわかって、キツく目を閉じた。

まだお風呂に入っていないし、みのりに断りの電話もいれていない。両親は出張で月曜日の夜まで帰らないそうなので、ダイニングに出っぱなしの料理も冷蔵庫にしまわなくちゃいけない。

わかっているのに、宥斗のことを考えると、その他の全ての思考が停止してしまう。

目の届く範囲にいろって、どっいう意味？

それは「幼なじみ」として？

それとも…？

意識を覚醒させてくれたのは、他でもない、宥斗からの電話だった。

『もしもし』

「も、もしもし…ッ」

『悪い、寝てた？』

「え？」

慌てて目覚まし時計を振り返ると、時刻は午前1時。

何時間ボーっとしてたんだわたしは…！！

『また明日かけるわ』

「宥斗！寝てない！！起きてたっ！」

電話を切るつとする宥斗に慌てて口を挟む。

『そうか』

「うん…」

妙な沈黙やめてよ〜！

もう、心臓の様子がおかしい！！

ありえない早さで打ってる！！

『紗衣、日曜日は、合コン行かない？』

「行かないよ！！」

行くなと言ったのは自分なのに、なんでそんなこと聞くんだろう。携帯をもつ手に力がこもる。

『じゃあ…さ。映画見に行かねえ？』

「映画？」

『うん。この前テレビでCMやってたやつ。お前、見たいって言うてただろ？』

「ああ…よく覚えてるね」

『紗衣と違って、頭もいいもので』

笑いながら言う、いつもと同じ調子の宥斗にほっとする。

気まずくなるのは、イヤだったから。

「はいはい」

『ははっ。でさ、日曜日から公開なんだと。だから…』

「行く!!」

『即答かよ』

嬉しそうな声を聞いて、胸が千切れそうな程にキュンとなった。

どうしよう。

宥斗が好きだ。大好きだ。

もう何年も前に気づいたことを、改めて確認する。

まだ「幼なじみ」でもいい。

傍に、いたい。

『じゃあ11時な。外出てろよ』

「うん!わかった」

『じゃあ日曜日に。遅くにじゅめん』

「ううん、おやすみ」

電話を切ってから、久しぶりの宥斗との外出へのワクワク感でなかなか眠れなかった。

そのままのテンションで過ごした土曜日はすさまじかった。着ていく洋服を選んだり、髪型を決めたり、久々にマニキュアを塗ってみたりした。

自分の浮かれっぷりに途中で気付いたけど、楽しみなものは楽しみだから仕方ない。

そして、今日もこうしてとんでもなく早くから起きている。

もう寝れないし…洗濯して掃除しちゃう。

今日はいい1日になるといいな。

そう思いながら、ベッドから抜け出した。

No.5(前書き)

今さらながら、行間が開きすぎて読みづらいですね…。次回小説を書く時は、もっと詰めて書くことにします…。

玄関に備えついている、大きな鏡の前に、お出掛け前の最終チェックをする。

チェックのプリーツミニスカートに、白いショートコート。
足元は茶色のニーハイブーツ。

いつもは下ろしてる髪の毛も、ハーフアップにして、毛先だけコテで巻いた。

メイクは学校にも薄くしていつているが、今日はアイシャドウをキラキラ輝くラメの入ったものにして、初めてつけまつげを付けてみた。

つけまつげには苦手意識があったけど、みのりに教えてもらったこのまつげはとても自然で、よっぽど近付いて見ないと、つけまつげと分らない。

マスカラを塗るより時間がかからないし、濃くないのに目が大きくみえる。

服装も、髪も、メイクもうまくいった。

それだけで、なんだかすごく嬉しくなる。

この自己満足感は、女の子特有のものだろうなあ…。

携帯で時計を確認すれば、時刻は10時50分。
待ち合わせの10分前だった。

「いつてきまーす」

誰もいない我が家に挨拶をして、玄関の扉を開ける。

そのまま門の外まで出てみるが、宥斗はまだ来ていなかった。

ドキドキする心臓を落ち着かせるために、ひとつ深呼吸をすると、
吐息が白く変わった。

12月も半ば、寒さが身にしみる季節になってきた。

平日は基本的にいつも一緒にいるのに、あの夜のこともあったせい
か、待ち合わせ（家の前だけ）して出掛けるということに異常に
緊張する。

あの夜からまだ2日。

2日間、ひたすらぐるぐる宥斗のことばかりを考えていた。

私を束縛するかのような、宥斗の言葉が嬉しかった。

それが、「幼なじみ」としてなのか、違う何かなのかはわからない。

だんだん冷静になった頭で考えれば、心配性な宥斗の事だ。

ベッドに押し倒したのだった。意地っ張りな私への、ある意味「警告」のようなものだったのかもしれない。

だけど、言葉の意味も行動の意味も、どうでも良くなる程に、嬉しかったのだ。

「女」としてじゃないかもしれないけど、目の届く範囲にいわれた。求められたその事実が、悲しいかな、私の恋心を刺激する。

告白して、振られて、傍にいらなくなるくらいなら。「幼なじみ」でもいい。

永遠に失うよりはずっといい。

携帯でもう一度時間を確認すると、11時を過ぎたところだった。

そろそろ来るかな、と、宥斗の家の方に視線を向ければ、ちょうど玄関から宥斗が出てくるところだった。

門の外まで出てきて私を見つけると、ギョツと眉を寄せ、少し離れた距離でそのまま立ち止まっている。

何やってるんだろう…。

「宥斗？」

小走りで近寄ると、視線をチラッと私の顔に向けてから、足元へとうつした。

「紗衣、まさかその格好で合コン行くつもりだった？」

「え?...変かな？」

みのり達と出掛けることを決めていたわけではないので、もちろん答えはNOだけど、まさか今日のために1人ファッションショーを催したことは知られたくない。

変だったかなあ...。

少し落ち込みながら宥斗を見上げれば、寄せられた眉はまだ戻っていないかった。

「スカート、短すぎるだろ」

言いながら、チェックのミニスカートを引っ張られる。

「ちよつと!!めくらないでよ!!」

慌ててスカートを手で抑えると、宥斗が手を離す。

「そんな短いので行ったら、男共のやる気に火がつくだけだろうが。」

「いやいやいやいや。」

だからこの間からその勝手極まりない法則はなんなんですか。というか、あなたのやる気には火はつきませんか。

スカートめくりって小学生か！

やっぱり女としてなんか見てないでしょ！

心の中でツツこみをいれて、最後の一文に自分でがつくりする。

私の判断は正しいと、再度思い知らされた。

「制服のスカートとそんなに変わらないでしょ！」

「制服より短いだろ。お前見てくれだけはそれなりにいいんだから、自覚しろよな」

「誰も私のことなんか見てないもん！！だけって何よだけって！」

「中身伴ってないからな」

「宥斗！！！」

「中身伴ってないからな」

「2回言うなあ！！！」

はあはあ……っ。

出だしからこれ！？先が思いやられるわ！！

がなりすぎて息切れしてる自分に疲れながらも、このやりとりすら楽しい。

ふと目線を上げると、私と同じく楽しかったらしい、笑顔の宥斗の姿が目にはいる。

黒いライダーズジャケットに同じ色のマフラーを巻いて、デニムにショートブーツを履いている。

デニムはよく見るとケミカルウォッシュだ。

無駄に長い足が引き立つ。

「行くか」

「…うん」

宥斗が歩きだす。

指摘された途端に気になってきたスカートの裾を押さえながら、私もそれに続いた。

映画の上映は2時からなので、その前にどこかでお昼ご飯を食べよう、という話になった。

私達の家から駅まで徒歩15分。

駅前にも小さな映画館があるけど、最近5つ程離れた駅に新しい映画館ができたらしい。

まだ行ったこともないどころか、その存在すら知らなかった私が驚いていると、せっかくだからそっちに行ってみるかと言ったので、電車に乗って移動する。

宥斗は既に、友達と何度か行ったことがあるらしい。

私がいつも友達と出掛けるのは、たいてい反対方面なので、その駅に行くのは久しぶりだった。

駅から直結した巨大なショッピングモール。洋服や雑貨のショップやフードコート立ち並ぶ中にその映画館があった。

先にチケットを買うために、映画館に入ってまた驚いた。まるで遊園地のアトラクションのような館内。チケットも、券売機で買えるという。

売り場に並んで、店員さんからチケットを受け取る、という従来の方法しか知らない私には衝撃だった。座席が自分で選べるのも便利だ。

作品名言つのもってなかなか恥ずかしいもんねえ…。

「あゝもうけっこつ埋まってんなあ」

宥斗が券売機の画面をタッチしながら操作する。

私達が見たい映画は、今日封切りとだけあって、見やすい席はどこも埋まっていた。

「おっ！ここ開いてるじゃん。けっこつ後ろだけど紗衣、いい？」

「どこでもいいけど…ん？この席カップルシートって書いてあるよ。これ何？」

「間の手すりがない席のこと」

「実にぞっくりした説明ありがとう…」

「ふたつの席が繋がってて…なんかソファーみたいになってんだよ」

「へ〜…。いいよ。見れるならどこでも」

言つと、宥斗はまた画面を操作して、お金を入れる。

「い〜くひん…」

「いいよ。お前はそのままった金でもつと丈の長いスカートを買え」

「なにそれ…合コンなんて行かないもん！！」

「合コンじゃなくても短かすぎるだろ」

「はあ…。いつからそんなおとんみたいな事言うようになったわけ？」

「よし。飯食いに行くか」

私の質問を華麗に無視すると、ふたり分のチケットを財布にしまつて、さっさとフードコートに向かって歩き始める。

「無視はよくないよ、宥斗くん」

わざとらしく言って、後ろからマフラーを引っ張ってやった。

「ぐえ」

「あははっ。カエルみたい」

「はあ…。紗衣はいくつになってもやること変わらねえな」

「宥斗は一気に老けたみたいね。おとんだし」

クスクス笑うと、宥斗が嫌そうな顔をしてから手で顔を覆う。

「おとん言うな！そんなに短いの履いているところ初めて見たから驚いたんだよ」

「家でこの格好はしないでしょ」

「まあな」

土日に宥斗と会うことはあんまりない。食事も両親がいるので届けなくていいし、お互い友達との予定もある。何もなくてもわざわざ家に行くことはほとんどなかった。

たまに両家で食事に出掛けるくらいだ。

中学生の頃はよく一緒に出掛けたけど、高校に入ってから一度もないかもしれない。

余所行きの格好で会うのは、考えてみれば久しぶりだった。

お昼時なので、フードコートはどのお店も人でごった返している。少し並んでから、パスタのおいしそうなお店に入った。

注文をして、メニューを閉じる。

「気にしてるようだから言っておくけどね、このスカート自分で買ったんじゃないからね」

「…誰に買ってもらったんだよ」

水を飲みながら、低い声で宥斗が呟く。

手の甲にめっちゃ筋たってる！！
割れるってば！！

あまり現実味のない心配をしながら慌てて、件の人の名前を言う。

「みのり」

「ああ、早坂か…」

早坂みのりとは、例の合コンに誘ってくれた私の親友だ。

高校に入って最初にできた友達。サバサバしたみのりとは、何年も前から知り合っていたかのように馬があう。

だいぶ前にふたりで買い物に出掛けた時。パンツスタイルの多い私に、「足を出せ!!」と、このスカート以外にも、デニムのショーパンツやらフリフリのシフォンスカートが無理やり誕生日プレゼントとして買ってくれたのだ。

1人ファッションショーでクロゼットをあさっていたら、そのときもらったものの、一度も着てなかったこのスカートが出てきた。

久しぶりの宥斗とのお出掛けに浮かれていた私は、たまにはかわいらしい格好もしたくなって、このスカートに白羽の矢をたてたのだ。

「宥斗、そういうの気にするタイプだっけ？」

中学生の頃は今日程じゃないけど、短いスカートも履いても、何も言われなかった気がする。

「紗衣のは気になる」

その発言は私も微妙に気になる。

「……………」

どう切り返すが迷っていると、宥斗が先に口を開く。

「パンツ覗かれても気づかなそうだろ、お前」

「パンツとか言うなあー!!」

この前から何を言い出すんだ!!

「さっきも言ったけど、もっと周りの目を自覚をしろってこと。そんなんだから年下なんか告白されんだよ」

いや、それは年下の方に失礼です。

と、いうか。

「なんで知ってるの!!」

「早坂」

「みいのりいゝ…!!」

「紗衣はモテモテだな」

「モ…!! 宥斗に言われたくない!!」

「俺のは無駄モテだ」

え、モテるのに、無駄とか無駄じゃないとかあるの？

「…最近は大丈夫か？」

「なにが」

「嫌がらせとか、さ」

言いにくそうに目を合わさず、宥斗が聞く。

ああ、まだ気にしてたんだ…。

「大丈夫だよ。みのりと宥斗のおかげで、あれ以来平和」

「そっか」

ほっとしたように、優しく微笑む。

私はその顔に死ぬほど弱い。

照れをごまかすように、早口で告げる。

「あの時だって別に大したことされてないもん。気にしすぎだよ」

瞬間、宥斗の顔色が変わる。

自分の失言に気づいたけど、もうどうしようもなかった。

下を向いて、何かに耐えるように宥斗がテーブルの上で拳を握る。

「お前…っ、どれだけ心配したと思ってんだよ！」

突然声を荒げた宥斗にびっくりする。

そこへちょうど、先ほど注文した料理が運ばれてきた。

タイミングが悪い。

宥斗は魚介のクリームソースパスタ。

私は和風ボンゴレだ。

「いや、悪い。俺が言えたことじゃねえな」

店員さんがいなくなってから、宥斗が呟く。

「うっん…」

…宥斗、そんなに気にしてたんだ。
でもそんなの宥斗のせいじゃないのに。

「なんかされたら、ちゃんと俺に言えよ」

「大丈夫だよ。もうすぐ卒業だしね」

「…たまには頼ってくれよ、俺のこと」

寂しそうに言うてから、パスタに口をつける。

食べ始めた宥斗を眺めながら、私は考えていた。

いつだって頼りにしてる。

嫌がらせなんて、宥斗の傍にいられる幸せに比べたら、全然大したことじゃない。

…だけどそんなこと言えない。そんなの、好きだと言ってるようなものじゃないか。

「頼りに…してるよ」

心に浮かんだ大部分の言葉は、パスタと一緒に飲み込んだ。

もうそのことには触れず、宥斗は私が残したパスタまですっかり平らげた。

おいしかったけど、なにせ量が多くて食べ切れなかった。食事を終えると、上映時間も近くなってきたので、映画館に向かう。

ご飯のお金くらいは自分で出したかったのに、「今日は俺が誘って付き合ってもらってるから」と、ここでも宥斗はお金を受け止ってくれなかった。

私が見たい映画を見に行くのに、付き合うも何もないのになあ。

まあそれなら今度はどこかに私から誘って、その時に払わせてもらおう。

勝手に決定した次の約束に、ひとりで嬉しくなった。

少し早めに着いた館内の人はまだまばらで、席には空席が目立つ。チケットの売れ行きからして、もうしばらくしたらいっぱいになるんだろう。

私達の席はスクリーンからだいぶ離れた後ろの方だったので、長い階段を登ってそこまで向かう。

「紗衣、ここ」

チケットと照らし合わせながら席を探していると、宥斗の方が先に見つけたらしい。

声のする方に向かうと、飛び込んできた光景に目を覆いたくなった。

「え…「」？」

「そう。座れば」

宥斗が先に席に着く。

それを見て私も慌てて座ったが、どうにも居心地が悪くてたまらなかつた。

カップルシートという名らしいその座席は、ソファーのようになっていて、狭い1人用の座席に座るより快適に映画を楽しめそうだった。

…座席だけなら。

なぜ。

なぜ他のカップルシートのみなさんは、人もまばらな中すでに満席状態なのか。

なぜ。

なぜみなさん揃って、「ここ日本ですよ」と声をかけなくなるほどいちゃいちゃちゅっちゅしているのか。

ここで宥斗と映画を見ると…！

ある意味拷問だわ…！

「…宥斗」

「なに」

隣の宥斗に声を掛ければ、涼しい顔をして携帯を操作している。

「カップルシートって、こつゆつ席なの…?」

「は?どういう意味?」

「み、みなさんいちゃいちゃされてますが」

「まあ、するだろうな。カップルなんだから」

携帯から目線は外さずに、しれつと答える宥斗をドツきたくなくなった。何回か来たことあるんなら知ってたんでしょー!?

「…恥ずかしい!」

心の底から声をあげると、まさにいちゃいちゃ真つ最中のみなさんから視線を頂いてしまった。

慌てて顔を下げた。

「恥ずかしいのはお前だ、アホ」

「……………!」

「紗衣、携帯マナーにしとけよ」

まだ視線がこちらに向いているような気がして、顔を下に向けたままカバンから携帯を取り出す。

大丈夫。大丈夫だ。映画がはじまるまでの辛抱…暗くなっちゃえば何も見えない!!

その後の十数分、私は耐えた。

隣やら後ろやらから、「映画はじまつたら、ナニする?」とか、「ねえ、暗くなつたら、キスして?」とか、「好きだよ。お前が一番かわいい!」とか言う台詞が聞こえる度に、私が言われてるわけでもないのに、恥ずかしくて泣きたくなつた。

そして気を紛らわすために、いちやつくみなさんに脳内でツッコミを入れまくる。

「ナニする気なの!! 映画館に来たのなら、映画を見る!!」「そのキスの計画の立て方おかしいから!! ご利用は計画的に!!」

「一番て!! では二番や三番もいらつしやるんですか!？」

ツッコミ疲れたところにやっと館内が暗くなって、予告がはじまる。

ほっとひと息つくくと、隣から強い視線を感じた。

「……………!!」

見てる!! 宥斗がめっちゃこっち見てる!! なに!?! 予告始まったんだから、スクリーンを見ようよ!!

「宥斗…どうしたの?」

小声で訪ねると、こっちをガン見たままの宥斗がお尻をずらして距離を詰める。

「な…!! 近いい…」

思わず出てしまった声はもうしまえず、肩がぶつかる程近くなった

宥斗から目をそらす。

すると、太ももの上に置いてあった手をむんずっ!!と驚掴みにされた。

びっくりして重なったふたつの手を凝視していると、耳に唇を寄せ、宥斗が囁く。

「…映画が始まったら、ナニする？」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

思い切り顔を振り上げて宥斗を見れば、ものすごい至近距離で、意地悪に、面白そうに笑っていた。

ぼんっ!!!!!!!!!!

脳内で、何かがはじける。

私の脳みそだったらドウシヨウ。

一気に顔が赤く染まり、目を合わせたまままた動けなくなった。どうやら私は、予想外にびっくりすることがあると、行動を停止してしまふ帰来があるらしい。

どうでもいい新事実を発見したまま、暗くて良かった、顔真っ赤通りこして真っ黒になってるかもしれない、と確認しようのない顔色を嘆く。

すると宥斗は、顔を離し、下を向いて肩を揺らしながら声を出さずに笑う。

そして、私の意識が覚醒する前にもう一撃。

「…紗衣、ホントかわいい」

優しく微笑んで最後の一言を放った宥斗は、顔をスクリーンに向ける。

私とは言えば、脳内大爆発、心臓破裂寸前、顔面（多分）真っ黒、生きているのが不思議なほどだった。

もう、なんのなの…っ！！

冗談にしたって、キツすぎる…！！

恐らく私に恋愛感情など持ち合わせていないであろう宥斗からすれば、あの夜のこと、今のことも、警告や冗談のつもりなんだろう。

しかしはつきりと宥斗が好きだと自覚している私にとっては、冗談じゃ済ませられない。笑えない。

優しく微笑んだ最後の一言も、冗談なの？

私以外の女の子にも、こんなことするの…？

思わず、重ねられた手を少しずらして、宥斗の親指を強く握る。大きな手。昔とは違う、男の人の手。

小さい頃は、どこに行く時も宥斗と手を繋いでいた。暖かくて、ふわふわしてて、宥斗と手を繋ぐのが大好きだった。いつの間に、こんなに大きくなったんだろう。

するとそれに気づいた宥斗が再度顔をこちらに向けて、嬉しそうに

笑う。

一度手をほどくと、指を絡めて繋ぎ直す。恋人繋ぎだ。

あの頃と変わらない暖かさを懐かしく思いつつも、その何倍も、宥斗と手を繋いでいる事実が嬉しい。

だけど、私の心に葬り去ったはずの戸惑いが広がっていく。

なんで、こんなことするの…？

わかんないよ…。

見たかったはずの映画のストーリーは、ほとんど頭の中に残らなかった。

No. 8 (前書き)

読んでいただき、ありがとうございます。

冒頭で8割話が書き終わっていると書きましたが、なんと半分くらいから書き直しています。

理由は後半にきての紗衣ちゃんの暴走。キャラがびっくりするほど勝手に動きます(´・`・´・´)

活動報告に、小話を書きましたので、興味ある方はご覧下さい。

ずっと映像は見ていたはずなのに、いつの間にかエンドロールが流れていた。

館内が明るくなり、人が出口に向かって流れていく。

上映自覚は2時間ちょっと。その間、手は繋がれたままだった。

「行くか」

宥斗は私を引つ張りあげて、手を離すと、そのまま出口に向かう。

ほどこかれた手を少し寂しく思っていると、段々自分の身勝手さに苛立ちが募ってきた。

手を繋がれた時は嬉しいけど宥斗わけわかんないとか思ってたくせに、離れたら寂しいだなんて…！

恋とはそういう身勝手なものなのだろうけど、初めて体感する感情に戸惑う。

あの夜までは、こんな風に自分の感情に振り回されることなんてなかった。好きだけど苦しい、という思いはいつも抱いていたが、苦しい部分はとても小さくて、概ね好きという感情は、とても暖かくて、それだけで胸がいっぱいになったり、宥斗の傍にいられることを幸せに思うものだった。

一人で勝手に喜んだり、落ち込んだり、あの夜から私の恋心は、目まぐるしく動くものになった。

「せっかく来たし、どっか見て行くか」

映画館を出て、ショッピングモールの出口に向かって歩いていたら宥斗が突然言った。

「え…」

「もう帰りたい？」

「うっん！」

満面の笑みで返す。

このまま帰るものだと思ってたので、素直に嬉しい。

進行方向を変えた後、スルリと手を繋がれる。またしても、恋人繋ぎ。

「嫌か…？」

少し頭を下げて心配そうな顔をした宥斗が訪ねる。

そんなの決まってる。

「嫌じゃ…ない」

宥斗が発する甘い空気に耐えられなくなって、そっぽを向きながら無愛想に答える。

でもきつと顔は赤くなってしまってるだろう。明るいところだと隠しようがない。

私の返答に宥斗は嬉しそうに笑ってから、「じゃあ行くか」と歩みを進める。

「紗衣、どっか行きたいところある?」

「うーん…お店ありすぎて、何から見たらいいかイマイチわかんないや」

「なら俺行きたいところあんだけど、いい?」

「うん!」

エスカレーターに乗って、階を登る。

着いた先には、男性物の洋服屋さんが立ち並んでいた。

「洋服見たいの?」

「ああ。この前来たときに欲しいコートがあったんだけど、色で悩んで決められなくてさ。面倒くさくなってその時は買わなかったんだけど」

「へえ…。なんでも即決の宥斗が珍しいね」

そのまま手を引かれて、宥斗のお目当てのコートがあるらしいお店に入る。

男性ブランドのお店に入るのは初めてで、ちょっとドキドキした。宥斗は迷いなくコートに辿り着くと、黒とカーキのコート指差した。

「これ」

「N3Bかぁ。似合いそうだね」

「紗衣、どっちがいいと思う?」

「え!?私!?」

「お前以外誰がいるんだよ」

「え〜…」

思わぬ大役を仰せつかって、ドギマギする。だいぶ拳動不審だ。だいたい男の人の服選ぶのだって初めてだよ〜!!

今まで宥斗以外の男と出掛けたことなどない。必然的に、何をすることも異性では宥斗が初めてになる。

私が選ぶのを、宥斗はじっと待っている。

コートを交互に見比べ、何度も宥斗を見やる。

…ダメだ!!どっちも似合いそうとか思っちゃう!!

惚れた欲目だろうか、まあ多分違うだろうけど、黒もカーキも、宥斗によく似合いそうだった。

少しの時間悩んでから、宥斗に告げる。

「ダメだ!!見ただけじゃわかんない!!着てみてくれる?」

「嫌だ。見ただけで選べ」

「はあ!？」

なーんーでー!?!? そんなに難しいお願いですかコレ!?! 選ばせるなら着てみせるくらいしてくれ!?!

脳内ツッコミが聞こえたのだろうか。 宥斗が顔を背けながら、ボソツと呟いた。

「…なんか恥ずかしいだろ」

ドキユンツ!!

頬を少し赤く染めて、スネたように呟いた宥斗から、見えない銃弾が飛んできた。

ピンポイントで私を撃ち抜いて、危ない、もう少しで再起不能になるところだった。

照れる宥斗!! 長年「幼なじみ」をやっているけどほとんど見たことがない。貴重だ。

「かわいい……」

思わず呟くと、宥斗が眉を寄せたので、慌てて叫ぶ。

「いいから!! 着て!! ね!？」

「……………」

無言のまま繋がれた手を離てから、マフラーを外し着ていたライダースを脱ぐと、私に差し出す。

あ、持ってるってことね。はいはい。

それを受けとると、宥斗はまずカーキのコートから袖を通す。またしても危なかった。かわいい、は高校生男子には言ってはいけない言葉だったらしい。

着終えると、やはり恥ずかしそうにこちらを向く。

「は〜…やっぱりN3B似合うねえ」

N3Bとは、コートの名称で、ミリタリーコートのようなものだ。丈が長く、だいたい膝上くらいまでで、薄いのがモフモフしたのまで色々あるが、宥斗の着ているのは裏地がキルティングになっていて暖かそうだった。

フードにはファーがあしらわれていて、宥斗の小顔っぷりを強調する。またそのファーがよく似合う。

じいっと見つめていると、宥斗の顔がますます赤くなる。なにこれ。ちよっと楽しい。いつもやられてばかりいるので、たまには仕返しとばかりに声あげる。

「似合うよー。かつこいいよ〜!!素敵だよ〜!!」

「お前…わざとらしいんだよ〜!!」

「写メ撮っていい?照れる宥斗貴重すぎる」

「やめろ」

ニヤニヤしながら携帯を取り出す私に嫌そうに言つと、カーキのコートを脱いでもう黒のコートを着る。からかいすぎたのか、照れ顔は完全に不機嫌顔に変わっていた。残念。

「ん〜。黒の方がしっくりくるんだけどなあ…でもカーキも新鮮でいいってゆうか」

宥斗は基本的に黒い服を着ることが多い。黒の方が宥斗っぽさがあったけど、カーキも新鮮で良かった。これは難しい…。

考えてる間にコートを脱いで、私の手からライダーズとマフラーを取る。そして、着ながら言う。

「どっち?」

「ん〜!!やっぱりこっち!!」

「黒?」

「うん。見慣れてるせいもあるかもしれないけど、黒の方が似合うし宥斗っぽい。」

「じゃあ、こっちにする。ありがとな」

うわ!!私の決定がホントに最終決定なの!?

「ちょっと待ってて」と、宥斗は黒いコートを持ってレジに向かう。

…なんか。

なんか今のやりとり、ちょっと恋人同士っぽくない!?

私はもともと買い物は一人で行く派で、みのりともセールの時くらいしか一緒には行かない。このスカートを買ってもらった時ののはイレギュラーだ。

セールの時は、たいてい建物の入り口解散、出口集合。各自好きなショップを回って、どうしても迷ったら合流する。その後カフェかカラオケで戦利品を見せ合うという流れだ。

あの時は珍しく、みのりも私のお気に入りショップについて来て、「足を出すことがいかに大事か」について熱弁した。

足は、出さないと筋肉が怠けて太くなるらしい。いつも出して緊張状態を続けると、自然と細くなるそう。みのりの持論だけど。

「紗衣はそれより、女子力向上が目的！」だそうで、パンツスタイルばかりではもつたいたいし、スキのある格好をすることこそがモテの秘訣なんだと拳を握っていた。

別にモテたくもない私は、新作のデニムを漁っていたが、振り向いたらみのりがレジで買い物を終えていた。

その中の一着が誕生日プレゼントと称して無理やり買って頂いた、今日のスカートである。

そんな買い物一人派の私が宥斗にうまくアドバイスできたかは謎だけど、選んだ服を買ってくれたのはうれしかった。

たまには誰かと買い物に来るのもいいもんだなあ。まあ宥斗とだから、かもしれないけど。

みのりはともかく、異性なら宥斗以外とは考えられない。これも恋心ってやつか。

宥斗のレジがなかなか終わらないので、店内を見て回る。

このお店の洋服はどれも宥斗に似合いそうで、いつそイメージモデルでもやったらいいんじゃないかと思うほどだった。

その中で、ふと、白いマフラーに目を奪われる。

触り心地のいいふわふわのマフラー。かわいいなあ…。

手にとって見ていると、レジから手ぶらで宥斗が戻ってきた。

「悪い。新しいの出してくれるみたいで、今倉庫に取りに行ってる。」

「あ、そうなんだ」

「それ、欲しいのか？」

宥斗が私の手にあるマフラーを指差す。

「そういうわけじゃないんだけど、ふわふわでかわいいなあと思って」

「多分、これの色違い」

自分のしている黒いマフラーをつまんで持ち上げる。よく見ると、本当だ。今私の持っているマフラーの色違いだ。

「あ、ホントだ。そのマフラーここで買ったの？」

「ああ。この前来たときに」

さつきコートの試着している時に見たのに気づかなかった。ただ、自然と同じものを手に取ったのは嬉しい。さすがに分かつていてお揃いを買うのは気恥ずかしいので、話ながらそっと棚に戻す。

「かわいいね。白いマフラーって持っていないから目についちゃった」

「今日の服に合いそうだな」

棚に戻したマフラーを宥斗が手に取った。

それをふわっと私の首に巻き付けらる。顔回りにある宥斗の手にドキキする。

「…うん。似合っじゃん」

やんわり笑って言われると、恥ずかしくて恥ずかしくて、さつき宥斗をからかった事を心の中で詫びた。

「これ、買ったら使うか？」

「あ、うん。制服にも合いそうだね。でも今日はやめ…」

まだ話してる私を無視して、宥斗はそのままレジに向かうと、倉庫から戻ってきたらしい店員さんに白いマフラーを渡す。

ええ！？買ったる！？

「宥斗！いいって！！」

レジに駆け寄れると、小声で宥斗に叫ぶ。

その間にも店員さんはマフラーのタグを切ってレジを打つ。
ああ…。

「ちょっと早めのクリスマスプレゼント。今年は何にしようか悩んでたから、ちょうどいいだろ」

宥斗はお財布を出して、提示されたお金を払いながら言う。コートとマフラー。バイトもしていない私からしたら大金だ。宥斗だっでしてないはずなのに、なんでそんなにお金持つてるの!?

私と宥斗は、毎年クリスマスと誕生日にはプレゼントを交換しあっている。もう何年も続く行事のひとつだ。

予定日が同じだったらしい私達の誕生日は1日違い。宥斗が8月12日。私が8月13日。

毎年夏と冬に2回。相手に喜んでもらえるプレゼントを考えるのはなかなか難しく、最近のプレゼントはギャグ化してる感じがいなめない。もちろん私はそんなプレゼントを選ぶのもとても楽しいけど。

だから宥斗の気持ちは分かる。でも今日はお金を出してもらいすぎだ。しかもお揃い…っ!!嬉しい。嬉しすぎる。でも。

お店の外に移動した私のところに、宥斗がコートに入った袋を肩から下げてやって来る。

「はい。メリークリスマス」

白いマフラーは袋に入れておらず、また宥斗によって首に巻かれる。すぐ使えるように、そのままもらってきてくれたようだ。

「…早くない?」

明らかにわざとらしく言う宥斗に下を向いて答える。

「当日はないからな。文句言つなよ」

「言わないよ!」

宥斗の首もとに視線を移せば、当然同じものが巻かれている。お揃い。…嬉しい!でも恥ずかしい。そればかりだな、自分。

「…ありがとう」

「どういたしまして。お揃い、だな」

お揃い、の部分に激しく強調して宥斗が言う。私がそれを恥ずかしがっていることに気付いているんだろう。意地悪だ。いつものことだけ。

また並んで、ショッピングモール内を歩き出す。

自然に繋がれた手がこそばゆい。

ギュツと握ると、会話の途中でも、握り返してくれる。

「他に行きたいところはある?」

私が訪ねると、ちようと建物の案内図がある場所で、宥斗は歩みを止める。

「俺はこれ買ったからもう満足。ほら、紗衣の行きたいところ選べ」

「ん〜…」

パネル式の案内図は、タッチすると、そのお店の情報が細かく出てくる。まるで最新の携帯電話のようだ。

私は目当ての店を探し続ける。

「あ」

「なんかあった?」

「ここ行きたい」

「アクセサリーショップ?でもこれメンズブランドだぞ」

「いいの。JJJがいい」

ふーん、と言うと、お店の配置が全くわからない私を、宥斗が引張って先導してくれる。

目当てのアクセサリーショップに着くと、宥斗は手を離してそっぽをむいた。

「宥斗？」

「…俺、いない方がいい？」

なんで不機嫌？

何をどうしたら、宥斗がいない方がいいのだろう！！頭の中を見せ
てみる！！

最近ポイントがよくわからないから困る！！

不機嫌、というよりもスネた風な宥斗を見上げて困惑する。

「いや、宥斗がいないと困るんだけど」

「なんで」

今度はあからさまな不機嫌な態度。もう、なんなのっ！？

「宥斗にクリスマスプレゼントを選びたいから、一緒にいて！！」

「え？」

驚いた顔で呆ける宥斗を店先に残して、私は店内へ入る。

普段ならひとりじゃ絶対入れないお洒落な店内は、周りを見ると緊張で怪しい動きをしまいそうなので、品物のみ集中する。

「ここは、先日読んだ雑誌の、「クリスマスプレゼント特集!!」というページに載っていたお店だ。」

確か、「男の子がもらってうれしいブランドランキング」みたいな感じだったと思う。

今年のクリスマスプレゼントはピアスにしようと思っていたので、男性ブランドなど分からない私はみのりに教えてもらいながら一緒に雑誌を見ていた。

先ほどみた案内図で、たまたま見覚えのあるこのブランド名を見つけたので、連れてきてもらったのだ。宥斗の気に入るものがあるといいけれど。

う〜ん…やっぱり高いなあ。

でも、今日はたくさんお金出してもらっちゃったし、今年は奮発だ!!

ひとりで息巻いていると、宥斗が真後ろにいた。

「うわっ!?! ちょっと、びっくりさせないでよ!?!」

「…俺に?」

「そうだってば!?!」

がなりながら、何にそんなに驚いているのか不思議でたまらない。宥斗以外の誰にプレゼントしろというのか。

「…いや、誰かにやるプレゼントを選ぶのかと」

「だからっ！！プレゼントあげる相手なんか宥斗くらいしかないもん！！」

「いや、うん。…やべえ、嬉しい」

満面の笑みで、ぼんぼんと頭を撫でられる。

うん、あの、いつまで撫でてるの。嬉しいけど恥ずかしいってば！
！…いや、ずっと撫でてもいいけど。

先ほどからの連続スキシンシップに、私の心臓もいい加減耐性がついたようだ。ドキドキはもちろんしているけど、爆発寸前まではいかない。

ほんのりとした幸せを、ただ感じられる。

「…宥斗、ピアス開けたいって言ってたでしょう。だから今年のクリスマスプレゼントは、ピアスにしようと思ってて」

宥斗が私の頭からすつと腕を引いて、手を繋ぐ。

「久しぶりのまともプレゼントだな」

ここ最近のプレゼントを思い出したのか、おかしそうに笑いながら宥斗が言う。

「あれだって、すっごい悩んで決めてるんだからね！？大切にしよう！？」

「わかってるって。」

ギャグは中途半端ほど恥ずかしいものはない。やるなら、ヒかれるくらいとことん！！な私は、ギャグなプレゼントを探し当てるために通販だつてする。

何をプレゼントしたかはあえて語らないけど、内容的には、笑いは取れるだろうけど私なら絶対欲しくないものだ。以上。

「そっぴや紗衣もピアス開けたいって言ってたな」

思い出したように、宥斗が言う。

「うん。でも卒業してからにする」

「真面目だなあ、紗衣は」

「あなたが不真面目すぎるの！！」

「はいはい」

宥斗は、うん、と唸りながらいろんなピアスを見ている。

もちろん店内にはいろんなアクセサリーがあつて、宥斗にすごい似合いそうな指輪があつたけど、眺めるだけで我慢した。

指輪は、贈れない。

私は「幼なじみ」なんだから。

「これ、いいな」

「…宥斗？確認だけど、ピアスは耳に開けるんだよね？」

宥斗が手に取ったそれを見て、恐々聞く。

「他にどこに開けんだよ。鼻か？」

「ホントやめて」

持っているピアスを鼻にあてる宥斗を速攻で拒否する。

「紗衣、鼻ピ苦手だっけ？」

「みのりが2年生の時に、鼻にピアス開けたのね。でも上手く穴が安定しなくて、もう恐ろしいほどに膿んでたの。それを毎日間近で見ながら、鼻にピアス開けてる人見ると痛そうで…」

思い出しただけでも鳥肌がたつ。

その時は、「見てて痛いからバンソコウしてくれ」とみのりに頼んだのに、こともあろうか、「めんどくさい。私には見えない」と言い放った。

結果、みのりの鼻に毎日消毒して、バンソコウを貼っつけていたのは私だ。

女子高生のポケットに常にマキロン。あんまりいないだろう。

それでも穴が閉じるのにだいぶかった。もうこれっきり、思い出したくない。

「ああ、毎日マキロン持ってた時のやつか」

宥斗も覚えていたらしい。顔をしかめる。

「そう。で、宥斗はファーストピアスから、そんな大きい穴をあけるつもりなの？」

「いきなりは無理だろさすがに。拡張器買って、徐々に広げんだよ」

「痛いー！！想像しただけで痛いー！！！」

開いてる方の手で耳を塞ぐ。

宥斗が選んだそのピアスは、普通のピアスよりもだいぶ太い。シルバーの丸い玉がついていて、別のピアスとセットになっている。こちらは普通のサイズのフープタイプのもの。模様が施してある。

「紗衣は痛くねえだろ」

「見てるだけで痛いんだってば！！それにしてもいいけど、当分宥斗と目え合わせないからねっ」

いくら恋する乙女でも、恐ろしいものは恐ろしい。あれが宥斗の耳についていると考えただけで顔を見れる気がしない。膿んだらもつと恐ろしいことになる。ブルブル。

もう完全にトラウマの域だ。

私もずっとピアスを開けたかったけど、みのりのを見て一気に開ける気がうせた。

だけど、耳たぶに普通のピアスならみのりもいくつもして、それが膿んだところは見たことがない。

みのりが大丈夫ならまあ平気だろう、とちょっとひどいことを思いつつ、また開けたいな、という気持ちが一番復活したのだ。

「…じゃあやめる」

「え？」

「こは「じゃあ見んな」って返してくるところじゃないの？
いつもの宥斗なら。」

「紗衣の顔が見れないのは嫌だ」

「……………！！！」

不意打ちで爆弾を落とすのはやめて頂きたい。

そちらにその気はなくても、こちらは相当のダメージを食らうのだ。

やっぱり今日の宥斗はおかしい。甘い空気がブンブンどころじゃない。ダダモレだ。

「じゃあ、これにするか」

爆弾を投下した本人は、すっかり気を取り直して新しいお気に入りを見つけたらしい。

「ペアピアス？」

初めて見たそれは、先ほどの模様の入ったゴツめのフープピアスと同じ模様の華奢な、やはりフープピアスがセットになっているものだった。ちなみに普通サイズ。

これどう考えてもカップル用だけど…。

「紗衣が開けるまで待つことにする。」

「一緒に開けるってこと？」

首を傾げて聞けば、宥斗は笑って頷いた。

「同じ時に開ければ、膿むのも同時だろ」

「その話題から離れて！！むしろ極力膿まない方向で進めて欲しいんだけど！？」

爆笑している宥斗を睨みつける。

「卒業式の日、一緒に開けよう」

照れも何もなく、優しく微笑む。私の一番好きな、宥斗の表情。

「…またお揃い？」

「ああ。」

「宥斗、お揃い好きなの？」

それこそ新事実だ。

でも、誰彼構わずお揃いにされたら私としてはたまったもんじゃない。繋がった手に力を込めて訪ねた。

のこ。

返ってきた言葉は。

「別に。好きじゃねえ」

「どつちだよ!?!」

思わず鋭いツツコをお見舞いしてしまった。耐え性がなくてごめんなさい。

「紗衣、これがいい」

手に持っていたピアスを私に差し出す。

「…でも、これじゃ私の分もプレゼントすることになっちゃうよ」

いくら多少割高商品とはいえ、半分自分のものになってしまったら、今日払ってもらった金額の割に合わない。

お揃いがまたひとつ増えることはもちろん嬉しいけど、それでは本末転倒のような気がした。

「これが欲しい。」

はつきりと強い意思を見せつけられては、もう何も言えなくなる。

「わかった」と返してレジへ向かう。

一応クリスマスプレゼント仕様に包んでもらってから、先にお店の外に出ていた宥斗に袋ごと手渡す。

「はい」

「ありがとな」

結局半分自分のものなのに、これでいいのか、と私は少し納得がいかなかった。だけど、いそいそ包みをあけて、さっき見たばかりのピアスを取り出して嬉しそうに眺める宥斗を見ると、喜んでくれるならまあいいか、という気になってくる。

几帳面にピアスを包み直してから、宥斗が言った。

「卒業式、楽しみだな」

「…そだね」

微笑んで答えたつもりだったが、うまく笑えていたかは、私にはわからない。

No.10 (前書き)

大学のサークル活動について、身勝手な表記があります。
不快に思われる方がいらっしゃいましたら、申し訳ありません。

そのあと、フードコートにあるお店でおいしいシャーベットを食べ
て、「寒い季節に食べるアイスはなぜおいしいのか」と、熱弁をふる
っている、「アイスはいつ食べてもアイスだろ」と、実に宥斗
らしい返答を頂いた。

一息ついてから時計を見ると5時を回っていたので、そろそろ帰ろ
うか、と駅に向かう。

そこから電車に乗って、最寄り駅に着くと、家までの道のりを歩く。
夕方の日曜日の駅前には、私達と同じく、帰宅するであろう人々で賑
わいを見せていた。家族連れやカップル。吐く息が白い。肩を寄せ
て、または手を繋いで。みんな楽しそうに、それぞれの家へと帰っ
ていく。

ロータリーに植えられている木を見渡すと、どの木もとうに葉が枯
れ落ちている。
落ち葉を踏みしめれば、シャリシャリと、小気味いい音がした。

目線を下に向けたので、宥斗にプレゼントしてもらった白いマフラ
ーが目に入る。

お揃い。それは嬉しい。嬉しいんだけど…。

ちらりと宥斗を見れば、視線に気づいたのか、宥斗が先に口を開く。

「なに」

「…宥斗、そのマフラー学校にもして行く？」

宥斗が制服姿でマフラーを巻いているのは見たことがない。

私としてはぜひ学校にもして行きたいが、万が一、宥斗もこのマフラーをしてきたら。お揃いのマフラーを巻いて登校する、なんてことになれば、宥斗親衛隊のみなさんを自ら刺激することになりかねない。

ずっとそのことが気になっていた。

卒業まであと少し。できればこんな時期に波風は立てたくない。

「今まで学校にはしてつたことねえな。でも明日から使つか」

「じゃあ私はやめとこう…」

「なんでだよ。せつかく買ったんだから使えよ」

気をつけるって言ったのは自分なのに！！わざとか！？新車の嫌がらせか！？

そのことを誰よりも気にしている宥斗にはありえないけど、私の脳内はありえない方向にツッコむ。

「…なんかされたら、絶対俺に言えよ」

黙った私の意図を汲んだのか、白いマフラーを引っ張って、言う。やっぱり気にしてる。そしてしつこいほど心配性。

「なんもされないでしょ。」

宥斗がそのマフラーして来なければ、と心の中で付け足す。

「もう氣い遣うのはやめたから」

?なんの話だろう。まさか親衛隊のみなさんに氣を遣っているのか。

「もうすぐ卒業だな」

さすがに話をそらされたことに気付いたが、話したくないことなんだろう。深く追求はしないでおく。

「そだね。もう一緒に学校通えないね」

「反対方向だしな」

私達はもう推薦枠での大学合格が決まっている。

高校は、家から近いのと、「宥斗が一緒だから」というので決めてしまったけれど、大学は違う。

将来に繋がる大切な選択、もうそんな子供じみたことは言っていない。

私は将来外資系ホテルでのフロント業務に就きたいと思っているので、いろいろな国の言葉を学べる英文科のある女子大へ。宥斗はスポーツ医療を学べる四大へ、それぞれ進学する。

路線は同じとはいえ反対方向に位置する大学に、共に登校するのは不可能だ。

「なかなか会えなくなるだろうね。なんか寂しいね。」

これがもし「彼女」なら、帰宅時間が合う時はどこかで待ち合わせで、今日のように買い物でも楽しむのだろうか。

「幼なじみ」の立場を痛烈に実感した私は少し寂しくなる。胸が痛い。

「会えるだろ。毎日飯届けに来てくれるんだし」

「あ。言ってなかったっけ？うちのお母さん、私の卒業に合わせて仕事やめるの」

「は！？聞いてねえよ」

心底驚いた顔の宥斗を見て、この話をしていなかったことを認識する。

「ごめん…話したつもりでいたんだけど。私が大学に入れば、ひと通り子育てにかかるお金もなくなるし、もう仕事辞めて主婦に専念するんだって」

「…おばさん、本当に仕事辞めるのか」

「うん…もしかしたら、私が家事を手伝ったせいで、心苦しかったのかなあってちょっと心配してるんだ」

「そんなことねえだろ。少なくともうちの親は、平日紗衣の飯が食えて喜んでる」

「そっか。それならよかった」

私の母親は、私が小さい頃から働きに出ていたけど、出来る範囲でいつも家事を頑張ってくれていた。

遅くまで働いてから、家のことをやる母親の体調が気になって、夕飯の支度をやってきたが、母はいつも食卓に並べられた夕飯を見て申し訳なさそうにしていた。

「高校生なのに、ご飯の支度なんてやらせてごめんね」、「遊びに出たいだろうに、ごめんね」といつも言っていた。

だけどそれとは裏腹に、私の作ったごはんを、「おいしい、おいしい」と喜んで食べてくれる父と母を見るのが嬉しくて、母の就寝時間の早くなつたのが嬉しくて、自己満足で夕飯の支度を続けていた。掃除も洗濯も、お弁当作りも母がやってくれる。

私は本当に夕飯を作るだけ、だ。遊ぶのは土日で充分だし、料理は好きだから全く苦じやないと母には伝えきたつもりだったが、もしかしたら重荷だったのかもしれない。

「気になるならおばさんにちゃんと話せよ。お前がそんなに落ち込んだら、おばさんだって悲しむ」

「ん。そだね。ありがとう」

「じゃあ卒業したら、もう紗衣の飯食べねえなあ」

「大学入ったら、サークルとかもあるだろうし家でごはん食べる方が少ないかもよ」

宥斗との接点は、卒業を機になくなっていく。わかっていたことだ。それでも、「幼なじみ」を選んだのは自分なのに。

今日が楽しすぎて、この先を望んでしまつ。宥斗と、ずっと一緒にいたい…。

「紗衣も？」

「何が？」

「紗衣も、家にいること少なくなんの？」

「いや、私は女子大だしねえ」

「それ別に関係ねえだろ。むしろ女子大のがコンパとか多そうだしな」

「そういうもんなの？」

「いや知らねえけど」

ならその情報はどこ調べなんだ。小さく笑つて私は言う。

「コンパとか、あつても行かないよ。出会いなんて欲しくないし」

最愛の人にはもう出会つている。

世界が狭いかもしれないけど、別にいい。私は宥斗がいい。

「俺だつてサークルなんか入らねえよ。人を遊び人呼ばわりするな」

いや、だからそれサークルに入つてるみなさんに失礼です。

宥斗の代わりに謝ります、ごめんなさい。

宥斗がサークルに入らないということにはほっとした。身勝手だけど、出来ればこれ以上、女の子の敵は増えて欲しくない。

「……ただ。このままじゃ……」

「でも、きっと今みたいには会えなくなる」

宥斗の顔が見れなくて、前を向いたまま告げる。

認めなくちゃ。弱い自分を。他の誰でもない、宥斗の前で。

私は「幼なじみ」。

この一言は、それを何よりも象徴する。

「……………」

話ながら、ちょうど家の前に着いた。

私から、繋いだ手を離す。

宥斗は黙ったまま顔を上げない。

「今日はホントに楽しかった。ありがとう宥斗。また、明日ね」

「……ああ。」

先に宥斗に背を向けて、小走りで家の中に入る。

ブーツを投げるように脱ぐと、階段を勢いよく上り、自分の部屋に入ると、そのままベッドにダイブした。

No.10 (後書き)

新しいお話を、一瞬で読み終わるくらい触り部分だけですが投稿しました。

「幼なじみ」が完結次第更新していこうと思っっていますが、なんせド変態が私の脳内で暴れまわるので、もしかしたら「幼なじみ」と平行してそちらの更新もするかもしれません。

もちろんこちらを優先して更新していきますが、よろしければご一読ください。

たくさんの方に読んで頂いてるようで、予想外のことには驚いています。とても嬉しいです。引き続き12月中の完結を目指して頑張ります。よろしく願います。

スカートがしわになりそうだけど、そんなこと今はどうでもいい。別れ際、黙り込んだ宥斗の事が気になる。だけど顔を見たらやっと決心した気持ちが鈍りそうで、逃げるように帰ってきてしまった。

宥斗はなぜ黙ってしまったんだろう。

いくら考えてもそんなの、私にはわからない。宥斗にしかわからないのだ。聞かなきゃ、答えは出ない。私はそれをしなきゃいけない。

怖いくらいに思考が冴え渡っている。これが、背水の陣をやつたんだらうか。

今朝、出掛けるまでは、「幼なじみ」ならずと傍にいられると思っていた。

だけど、それは大きな間違いで、ずっと傍にいられるなんてことはありえない。

宥斗にもし「彼女」ができれば、宥斗は今日のように「彼女」と過ごすんだらう。

そうしたら、私と一緒にいることなんてしなくなる。

当たり前だ。「彼女」より「幼なじみ」を優先する男がどこにいる。

仮に、宥斗にこのまま「彼女」ができなくても、一緒にいられるのは卒業まで。

そこから先は、もうそれぞれの道に行く。

私も大学に入ったらバイトをしたいし、コンパには行かなくてもきつと友達と出掛けることも増えるんだろう。

宥斗だって同じだ。

夕飯は母が作るようになって、届ける名目で会うことも叶わない。

いや、届けるだけならできるかもしれないが、そもそも今のように、毎日決まった時間に家に帰る生活じゃなくなる。

なんて浅はかな勘違いをしていたんだろう。

「幼なじみ」では、宥斗の時間を独占することなんてできないのに。宥斗も、私に会いたいと思ってくれなければ、会うことすら難しくなる。

宥斗と話していて実感した。

自分はそのことにとっくに気づいていたのに、振られるのが怖くて逃げていただけだ。

宥斗の行動の意味を考えてもやっぱり分からない。

期待する気持ちがあったのは最初だけで、ベッドに押し倒されたのも、手を繋いだのも、かわいいと言われたのも、お揃いのものを買ってもらったのも全部事実だけど、やっぱり私以外の子にもするのかもしれない。

それだって、聞かなきゃ始まらない。

もう逃げるのはやめよう。

逃げて、宥斗とずっと一緒にはいられない。

そのためには、この気持ちを宥斗に告げなくちゃ。

どうせ一緒にいられなくなるなら、気持ちを伝えてからがいい。

そして、出来ることならこの先も宥斗の隣いるのは私でありたい。

言おう。

宥斗に。

失うことを恐れるほど、私が一番大切なあなただから。

欲張りで、ごめん。

「幼なじみ」「じゃ嫌だ。

私、宥斗の、「彼女」になりたい。

「…紗衣。さくえく!!」

「ん…?」

「もう9時だよ。起きな」

「9時…。9時?」

ガバツと起き上がり顔面蒼白になる。私はいつの間に眠ってしまったんだろう。

「ちつ遅刻ー!!!」

「大丈夫。夜の9時だから」

慌ててベッドから飛び降りた私に、母がのんびりと告げる。

「夜か…なんだあ…」

びっくりした。自慢じゃないが今のところ皆勤賞なのだ。

3年の12月、こんな時期に寝坊で遅刻なんてシャレにならない。もうすぐ卒業なのに。

卒業…

「あれ、お母さん? 帰りは月曜日の夜じゃなかったっけ?」

寝起きのせいもあるだろう、思考にふけりそうになった自分に待つ

たをかける。

出張でないはずの母が、エプロン姿で私の部屋にいる。

「仕事が早めに片付いたの。最後の出張終わっちゃったー！開放的でいっぱい！！」

ニコニコ笑いながら言う母に、先ほどの宥斗との会話を思い出す。聞いてみよう。ちゃんと。

「お疲れさま。お母さん、ごはん作ってくれたの？」

やはりシワだらけになってしまったスカートを払いながら、着ていたコートを脱ぐ。

布団もかけずに眠ってしまったのに、温かかったのはこのコートのおかげらしい。

私の人生においての、一大決心をしていたはずなのに。間抜けなことだが、うたた寝をしてしまったようだ。うたた寝、というには少し長い眠りになったが。ここ数日続いた寝不足のせいだろう。

あの高揚感を返してくれ。

あのままの勢いなら、すぐにでも宥斗に伝えに行けた、…かもしれない。

「うん。久しぶりにケーキも焼いたの。お父さんは予定通り明日の夜になるみたいだから、一緒に食べよう」

「わ〜！！うれしい！何のケーキ？」

「紗衣の好きないちごのタルトだよ。出張先で、早ものいちごが売ってたから、たくさん買ってきちゃった」

「ありがとう！！すぐ着替えちゃっね」

いちごのタルトと聞いて一気に眠気が吹っ飛ぶ。母の作るケーキはどれもとてもおいしいけど、無類のいちご好きの私に、そのケーキは何よりのご馳走だった。

部屋着をクロゼットからだしていると、まだ私の部屋にいた母が言う。

「あらあら！今日はずいぶんかわいらしい格好してるのね。デート」
「？」

完全に面白がっている。でも期待にお答えできなくてすみませんね。

「デートじゃない。宥斗と映画見てきたの」

「きゃ〜！ゆうちゃんとデートだったの!?!」

「だから！！デートじゃないっ!?!」

人の話を聞いて欲しい。何をそんなに喜んでいいのかよくわからないけど、まあ楽しそうだからいいか。ゆうちゃん、とはもちろん宥斗のことだ。

「そんなに短いスカート履いて！ゆうちゃんヤキモチ焼かなかったあ？」

「ヤキモチは焼かれてないけど、なんか怒られたよ。最後までぶつぶつ言ってた。そんなに短いかな。見苦しい？」

自分のスカートを見下ろす。母にまで指摘されるとは、やはり短いだろうか。制服と変わらないと思っていただけ、短かすぎて見苦しいのかもしれない。

「全然！よく似合ってるよ。せっかく私譲りの綺麗な足してるんだから、出さないと！！」

私譲りって。お母さん、勘弁してください。

「みのりにも言われたの。足を出せって」

「そのスカートみのりちゃんに誕生日の時にもらったやつでしょ？いつ履くのかな」と思ってただけどまさかゆうちゃんとのデートに履いてっちゃうとはねえ」

やれやれ、と頭を振りながら言われて、デートじゃないっていう私の主張は再度無視された。

1人ファッションショーの成果を二度も、それも別々の人から否定されてちよつと打ちひしがれる。

「髪もかわいいよー紗衣。美人に産んでくれてありがとう、って言ってもいいよ？」

こっちはおかまいなしに続ける母に、げんなりする。

「美人に産んでくれてアリガトー」

全くもってそんなこと思ってもないけど、棒読みで答える。
私が美人なわけあるか。

「どういたしまして」

ケラケラ笑いながら、母は私の部屋を出て行く。

部屋着に着替えてリビングに向かえば、ダイニングテーブルの横に思わずツッコみを入れずにはいられないほどのいちこの箱が、山積みになっていた。

「いや、買いすぎでしょ」

「紗衣箱食いしていいよ」あとで麻理子ちゃんどこにも持って行くと思うてるから、その分はとっておいてね」

キッチンから料理を運んできた母は楽しそうに言う。

麻理子ちゃん、とは宥斗の母親のことである。

ちなみにうちの母の名前は紗理奈というが、母親ふたりは未だにお互い名前をちゃん付けで呼びあっている。

「さすがにこんなに食べれない……」

「そんな事言わないで食べて」

この量を新幹線で持って帰ってきたのか。相変わらずものすごいバイタリテイに頭が下がる。

「手伝っよ」

「ありがと。じゃあ、スプーンとお箸と、小皿並べてくれる？」

うん、と返事をして、食器棚を開くと、隣に立っている母が「あら」と声をあげる。

「紗衣、つけまつげしてるの？」

「うん。みのりに自然なつけまつげ教えてもらったの。化粧の時間短くなったし、便利だよ」

さすがに目ざとい。だけど、宥斗と出かけた後だと知られているので、張り切ってお洒落をしたのがバレるのは恥ずかしかった。いや、多分もうバレてるけど。

「近づかないとわかんなかったなあ。上手に付けたねえ。最近のつけまつげってすごいよね。すごい自然!!」

「アリガトウ…」

娘をそんなに誉めないでくれ。

うちの母は、化粧品会社に勤めている。だからなのかはわからないけど、私が少しいつもと違ったメイクを施すと、すぐに気づく。

「ゆうちゃん気付いた？」

でっかい目を三日月型に細めて笑う母。

「…っ気付いてない!!」

今し方、近づかないとわからなかったと言いませんでしたか！

そっという意味ですか!?

恋愛思春期の娘をからかうのもいい加減にして頂きたい!!泣くぞ

！！

「なあ〜んだ。やっとラブラブな二人を見れると思ったのに〜」

残念。と言いながら母はダイニングテーブルに足を向ける。

どんな誤解をしているのかわからないけど、私は今日映画を見に行つたんであって、至近距離で見つめ合うようなことはしていない！！と、脳内でツツこんでから、明かりの落とされた映画館での宥斗を顔を思い出して、ぽんつと小爆発を起こす。

「やっぱりなんかあった!？」

「ないっ！！！！！」

ダイニングで母がゲラゲラ笑い声を上げている。

この状態の私を見て、何もなかったというのは不可能なことは分かっていたけど、おかまいなしに否定する。

近付かなければできない行為はしていないけど、至近距離には、宥斗の顔があった。綺麗な顔。思い出すとさらに顔に血が登るのを感じて、必死に脳内メモリを閉じる。しばらくはこのメモリに悩まされ続けるんだろう。幸せなことだけ。

準備を終えて、「いただきます」と声を合わせてから、二人で食べる。遅めの夕食だ。

「お肉ホロホロ！おいしいっ。お母さんの作ったシチュー食べたかったからうれしい〜」

目の前のビーフシチューを食べれば、先ほどまでからかわれていたのなどすでに記憶の彼方に飛んでいってしまった。

圧力鍋でホロホロに煮られた牛スネ肉は、煮込まれたシチューと絡んで最高においしかった。

どんなに毎日夕食を作っても、母の腕にはほど遠い。やっぱり母の料理が一番だ。幸せ。

「ふふつ。たくさん食べてね。食後にタルトもあるから、その分はお腹開けておいて」

「タルトは別腹だもん」

付け合わせのシーザーサラダもむしゃむしゃ食べる。クルトンも手作りしてくれたんだろう。市販のものとは一味違う。

疲れて帰ってきたのに、私のために並べられた手の込んだ夕食が、嬉しくていつもよりたくさん食べる。

ふと、視線を感じて顔を上げると、母が微笑んで、私を見ていた。

「なあに？」

「ううん。大きくなったなあって思っつて。ついこの間まで、ママ」
つて、私が見えなくなると泣いてたのに。」

慈しむような瞳の母は娘の目からみても、とても美しかった。

最後の出張を終えて、思うところもあるんだろう。

「だいぶ昔の話じゃない？」

なんだか照れくさくて、笑いながら返す。

「お母さんにとっては、つい最近なの。…髪も、高校に入った頃は短かったのに、そんなに伸びたのね。毎日見てるはずなのになあ」
苦笑しながら言う母が切ない。なぜそんなに自分を責めるんだろう。後で必ずちゃんと話をしよう、と決心を新たにす。

「いつの間に長くなっちゃったなあ。そろそろ切るのかな」

父譲りの真っ黒な私の髪は、胸下まで伸びている。

ごはんを食べる時に、ついすっかりお皿に入ってしまったりして、邪魔になることが多い。

こだわりがあつて伸ばしているわけではないので、そろそろ長さを短くしたいと思っていた。

「今日麻理子ちゃんちようど休みだし、切ってもらえば？」

「ん、今日はいいかな。巻いちゃってるし」

時刻は午後9時半を過ぎているが、母と宥斗のお母さんの間には、時間の概念があまりない。

休みが合った日には、ファミレスに朝方まで居座り話し込んでいる。女子高生かつ!!

宥斗の母親は美容師をしている。自分の店を持つよりも、人の下で働く方が性に合うようで、近所の美容室でもう長いこと働いている。美容師なのに、「子供たちとの時間がない!!」と言って土日休みをもぎ取った彼女は強者。

宥斗のお母さんというよりは、お姉さんと言った方がいい程若くて綺麗。さすが、あの宥斗を産んだだけある。うちの母も割と美人な部類に入るので、ふたりが並んでいると、とても子持ちの40代に

は見えない。

ふたりとも実際若いのだ。20歳の時に兄たちを産み、25歳で私と宥斗を産んでいる。43歳。

同い年で、子供達ふたりも同学年。それも、下の子たちの予定日が同じ。これは運命だ！とよくふたりで騒いでいる。

ちなみにうちの父は母と同い年の43歳。宥斗のお父さんは、少し離れて49歳だ。

「麻理子ちゃん、最近紗衣に会ってないって嘆いてたよ」

「そつえば会ってないかも。平日はおばちゃん帰って来るの遅いしね」

宥斗のお母さんの働く美容師は、営業時間が少し変わっていて、昼の2時から夜10時まで。片付けをして家に帰ってくるのは11時過ぎで、私はその頃にはもう自分の家に帰っている。

宥斗が中学3年の頃までは8時には家に帰って来ていたが、高校生になるとお店の営業終了時間まで働くようになった。

「切ってもらおうかな。今度電話してみる」

「ついでに髪も染めちゃえば？もう大学合格したんだし、やっちやえやつちゃえ！」

娘に髪を染めるようにすすめる母親。いかななものか。

うちの高校は公立で規則はないに等しい。偏差値的には上の中とい

ったところで、一般で受験に挑む子がほとんどだ。みんな今は髪を真っ黒に染めている。

「みんな受験モードだし、染めるのは卒業してからにするよ」

もう追い込みの時期。みんな遊びたいのを我慢して必死に勉強しているのに、自分だけ髪を明るくして登校するのは気がひけた。

「ゆうちゃんはまつ茶っ茶じゃないの」

「ああ、宥斗はある意味学校中に許されてる感があるからねえ……」

「なんとなくわかるけど」

言って、母が苦笑する。

「ん〜、やっぱり髪切るのも卒業してからにしようっ。髪切って、染めたら気分も大分晴れるだろうっし」

「何か落ち込む予定でもあるの？」

不思議そうに母が訪ねる。

自ら自分の心情を暴露してしまった私は慌てて否定の言葉を並べる。

「ないよ！…ないない、全然ないです！！あ！！おかわりしてくりゆー！！」

なぜいきなり敬語。しかも最後噛んだ。しっかりしろ自分！

母の質問攻めに合わないうちにダイニングから逃げ出す。

危なかったあ…。

落ち込む予定前提な自分が悲しいけど、勝算が全くわからない以上、告白するなら宥斗を失う覚悟はしなければならぬ。

おかわりのシチューを鍋ならよそいながら、考える。

産まれた時から、いつも一緒だった。

嫌がらせにあっても、そんなことより宥斗と一緒にいたい気持ちの方が強くて、離れられなかった。

宥斗のいない生活は正直想像もできない。

それでも言わなきゃ。

失う前に気づけて本当によかった。悲しい想いも、喪失感も味わうかもしれないけど、後悔するよりは、ずっといい。

短く息を吐いて、気持ちを落ち着ける。

私にはもうひとつやらないことがあるんだ。

なんでもない顔をしてダイニングに戻ると母は何か言いたそうにしていたが、その口から質問を浴びせられる前に、自分の口を開く。

「お母さん」

「なあに？」

サラダを口に加えながら、母の視線が私に向く。

「仕事、本当に辞めちゃうの？」

「うん。だってもう働く理由もなくなるし」

紗衣が無事に大学に合格してくれたからね。と微笑えむ。

「でも、仕事好きでしょう？」

お金のためだけに母が仕事をしていたとは思えない。

確かに毎日忙しくて大変そうだったけど、女の子のキレイを手伝うことできる素敵な仕事だと、いつも言っていた。

私のせいで、それを失って欲しくない。

「私のせいで、仕事を辞めるなら、ご飯作るのもうやめるから…」

最後は涙声になってしまった。

涙が瞳から溢れ出さないように、必死で耐える。

泣くな。私。泣いたらお母さんが余計に気にする。

部屋着であるフリースのパジャマズボンをギュツと掴み、全身に力を込めると、母が慌てたように立ち上がって、向かい合って座っていた私の元へと飛んでくる。

「あらあら！どうして私が仕事を辞めるのが紗衣のせいだなんて思うの！？」

下を向いていた私を覗き込む母の顔は、とても困っていて、すぐにも返事をしたかったけど、今口を開いたら涙をこらえる自信がなかった。

荒い呼吸を何度も繰り返して、気持ちを静める。

「わ、私が…家のこと手伝ったから…お母さん、心苦しかったのかになって…」

「そんなことないよ！！いつもおいしいごはん作って待っていてくれるの、すごい嬉しいよ！！」

母は大袈裟に言うと、力を込めてすぎて血管が浮きだっている私の拳を、そっと包んだ。

白くて綺麗な母の手。

仕事が忙しくても、家事が大変でも、自分のキレイを怠らない母のその手はとても温かい。

「確かに、紗衣には本来なら私のやらなきゃいけないことを任せちゃって、申し訳なくは思ってる。高校生なんて人生で一番楽しく遊

べる時期なのに」

「私は別にそんなに遊びたいと思わない」と涙声で告げれば、「お母さんはそうだったの」と笑う。

「それも今思えば、だけどね。大人になると高校生でいられる時間は、貴重だったなあって思うの。だからそんな紗衣に、家のことをやらせるのは申し訳ないとは思ってるけど、それ以上に、紗衣が私やお父さんを心配してくれる気持ちが嬉しいんだよ」

「私の心配は、重荷じゃなかった…?」

母はかぶりを降って続ける。

「そんなことは絶対にならない。紗衣の気持ち为重荷だなんて、お母さんには有り得ない。他の人がどうだか知らないけど、私は絶対にならない。」

いよいよ涙腺が崩壊する。

もう溢れるものを抑えられなくて、嗚咽をこらして涙を流す。

泣きじゃくる私をそっと抱き締める。腕の隙間から見えた母の顔もまた、涙で歪んでいた。

「紗衣、お母さんが仕事辞める話をしてから、ずっとそんな風に思ってたの？紗衣のせいで、私が仕事を辞めるって?」

私はもう話すことができなくて、首を縦に降ることで返事を返す。すると、私を抱き締める母の腕に力がこもる。

「本当に優しいね…紗衣は…。優しすぎて、社会渡っていけるか不安になる」

「親バカだね」と笑う母に私は今度は首を横に降る。

私は優しくなんかない。

母が申し訳なさそうにしていたのをわかっていて、それでも自己満足のために家のことをやっていたのだ。
優しいんじゃない、ただの自分勝手な子供。

抱き締めていた腕をとくと、ティッシュを持って来てくれて、それから私の隣にある椅子に座る。

ティッシュ、ありがたい。

盛大に咬ませて頂こう。

そんな私を見ながら笑った母も、持ってきたそれで目元をぬぐう。

「…お母さんね、お父さんと結婚したのが、20歳の時で、入籍しただけ働いて、すぐに家庭に入ったんだ」

初めて聞く母の話に耳を傾ける。鼻をかんだら少しすっきりして、涙も徐々に治まってきた。

「毎日幸せだね。子供がこんなにかわいいものだなんて知らなかったし、子供と遊びながら家のことをやって、お父さんの帰りを待つ、それだけなのに本当に毎日楽しくて」

幸せそうな母の笑顔がそれを何よりも物語っている。

私はテーブルの上にあるコップを手に取って一口飲み込むと、母に続きを促した。

「もちろんやりたくて始めた仕事だったけど、未練なんて全然なかった。若かったけど、遊びにでたいなんて思うこともなくて、このままずっと専業主婦でいたいって思ってたの。仕事するより、子供の傍にいたかった。そしたら今度は紗衣ができて…家を建てようって話になったのね」

「ちよつと待って」と、再度立ち上がると、デザートのはずのいちごのタルトを持ってきてくれた。
長くなるから、食べながら聞いて、ということらしい。

タルトを遠慮なくつつきだした私に母は嬉しそうな表情を見せる。
「ただ残念ながら、味があまりわからない。
鼻がつまっているせいだろう。」

「基礎工事も終わって、さあローンを組むぞっていう時に、お父さんの会社が倒産しちゃったの。本当に何の前触れもなく、ね。ローンの事前審査は通ってたし、まさかそんなことになると思ってなかったから、お父さん落ち込んでね。ほら、お父さんの仕事特殊じゃない？新しい仕事もなかなか見つからなくて」

うちの父は、楽器製造の仕事をしている。その中でも塗装の吹き付けをやっていて、かなり特殊な職業だ。

私が小さい頃から毎日遅くまで働いて、休みもあまりない。

なのに、「給料が全然上がらない。お母さんの方が稼いでる」と嘆いていたのを聞いたことがある。

「ただ父は、その仕事をとても愛していて、家でもよく家具や自転

車の色を塗り替えたりしていた。

一度母に頼まれて、携帯の色を塗り直しているのを見た時は感動した。子供ながらに、お父さんの仕事はすごい、と思ったことを覚えている。

そんな忙しい父だったけど、休みの日は早くから起きて、いつも私き達ようたい兄妹を遊びに連れて行ってくれた。

たまに早く帰れた日にはお風呂にも一緒に入っていたし、寝かしつけてくれることも多かった。

率先して家事も手伝っていたし、休みの日に母が朝の家事を終えて疲れてうたた寝してる時などは、決して起こすことはせず、父がご飯を作ってくれた。

優しいのだ。いつもふざけたことばかり言って、母によく怒らているけど、ふたりは今でもとても仲がいい。

休みの日に母が、宥斗のお母さんと出かけてしまうと、家の隅っこでわかりやすくスねている。

高校生にもなると、父親を鬱陶しく思うらしい友人もたくさんいるけど、私は父がとても好きだ。

いくつになっても母のことが好きで堪らないらしく、いつも追っかけ回しては一喝されてしょんぼりしている。

私達兄妹にもとても優しく、基本的な躰には厳しかったけどその他のことではさく言われたことはない。

話せば、どんなに小さな話だって、大袈裟に反応して聞いてくれて、何かを頼めば必ず力になるうとしてくれる。

掘の深い、整った顔の父は最近ちょっと出てきたお腹を心配しているけど、私にとってはいつまでも自慢の「お父さん」だ。

「それで、ようやく決まった新しい仕事が、本当にお給料が安くてね。ローン払ったらもう毎月ギリギリの生活だったの。私は節約も楽しんでやっていたんだけど、紗衣が幼稚園に入るころかな。お父さん、仕事を変わるって言い出して」

責任感の強い父のことだ。

きつと、節約して自分にはお金を使わない母を見かねてそう言ったんだろう。

当時の様子が目に浮かぶ。

「私は自分の好きな事を仕事にして、それに誇りを持っているお父さんが好きだったの。だからどんなにお給料が安くても、塗装の仕事を続けて欲しかった。確かにお金を稼ぐことは大事かもしれないけど、それだけじゃないじゃない？」

「うん」と私が頷いた時には、タルトの乗っていたお皿なキレイに空っぽになっていた。

「ごちそうさま。また明日も食べよう。」

「紅茶飲む？」と聞かれたけど、首を横に振った。それより早く話の続きが聞きたい。

「少ないお金でやりくりするのは楽しかったし、お父さんとあなた達がいるだけで私は満たされてた。ただお父さんにはそれが辛かったのね。ちよつとした贅沢もさせてあげらなくて、悩んじゃったみたい。仕事を変えるって言い出した時、そんなことするくらいなら私が働くって、紗衣がまだ幼稚園に行ってる頃からまた働きだしたの」

母が働いていたのにはそんな理由があったんだ。

私はもう開いた口が塞がらなかった。

うちはすごく裕福ではないかもしれないけど、貧乏というほど貧相な思いをしたことはない。

それは母が働いてくれたおかげだったのか…。

「最初はねー、辛かったなあ。子供達と一緒にいられる時間が少なくなつて。特に思春期に入ると、やっぱりいろいろあるでしょ？そういうの傍で支えたかったのに」

「全然できなかった」と、涙を流す母を見て、私の涙腺はまたしてもあっさり崩壊する。

「そんな…そんなことないよ。お母さんもお父さんも、いつも私達のことばかり考えてくれてたじゃない」

5つ上の兄でさえ、「俺は家族に恵まれてるな」と、いつかのお正月に酔っ払った時に話していた。

同じく酔った父はそれを聞いてわんわん泣いていた。「親父がちょっとづいのが問題だ」と言われても、泣きながら兄に抱きついていた。母はそのことを知らないのだろうか。

「ありがとう。紗衣がそう言うてくれると気持ちが悪くなるな。でも、今はこれで良かったと思ってるの。お金がなかったら、やっぱりあなた達にしんどい思いさせたかもしれないし」

そこで、同時に鼻をかんでから、目を合わせて笑う。

お互いに鼻は真っ赤、目も真っ赤、私に至っては、つけまつげもとれて恐ろしいことになっているだろう。

「だからね、子供たちにお金がかからなくなったら、仕事を辞め
て決めてから働きに出たの。それこそ十年も前の話。今は貯蓄
もかなりできたしね。変な話だけど、辞めるのを楽しみに頑張っ
てきたんだよ。お兄ちゃんさっさと一人暮らしはじめちゃったけど」

言いながらケラケラ笑う。

でも母は、兄が家を出る時だって何も言わなかったはずだ。

そういう人なのだ。この人は。

「まさか紗衣がそんな風に思ってるなんて、わからなかったなあ。

ごめんね。そんな風に思わせて。紗衣のせいなんかじゃないよ。だ
けど聞いてくれて良かった。ありがとう」

「う、ううん…。私もごめんね…。お母さん。ありがとう…」

何年分の涙を今日使い果たしたのだろう。

すでに目が半分も開かない。ちゃんと冷やしてから寝ないと、明日
の朝は悲惨なことになりそうだ。

自分の検討違いっぷりに、少し恥ずかしくなったけど、やっぱりち
やんと聞いてよかった。

もともと母が働きに出たのは、言うなれば苦汁の決断だったという
こと。

私の自己満足を、母は重荷どころか、ただ素直に喜んでくれていた。

いつも明るく楽しそうな両親にも大変な時があったのだ。 思いも
よらない話、だけどそれも、私達を父を、母が大切に思うからこそ
の出来事。

聞かなきゃわからない。家族だって、話さなければ、伝わらないことはたくさんあるのだ。

言わなくても分かるだろう、は今日限り辞めようと私は思った。ささいな事でもちゃんと話そう。母もそれを望んでくれている。

テーブルの上に山積みになされた鼻水だらけのティッシュ。

これは母と私の思い。

私はまだまだ視野の狭い子供で、それを思い知った。それから、いつでも私のことを大切に思ってくれている家族がいることを改めて認識する。

大丈夫。なにがあっても、この先どんなに悲しいことがあったとしても、私には家族がついている。

今日のことを、ずっと忘れないでいようと思った。

No.14 (前書き)

お気に入り登録というのが100件を超えたようです。

たくさんの方に読んで頂けているみたいで、とても嬉しいです。ありがとうございます。

完結まで頑張りますのでよろしくお願いします。

月曜日。

昨日はあれから母と夜中までいろいろな話をした。

今まで聞いたことのない話。具体的に言うと、父と母のなれそめが大部分で、後半完全にただののろけだったが、父のことを話す時の母の顔は40を超えても恋する乙女そのものだった。

出会ったふたりが気持ちを伝えあって、恋人になり、結婚して、家族になる。

それは今の私の理想そのものだった。

思わぬところで、腹を決めた自分へ追い風のような賛辞をもらえて、それが私の勇気になる。

今日、この気持ちを宥斗に伝える。

やっぱり卒業式の後にしようかな、と時々臆病な自分が顔を出すが、それまでに宥斗にもし「彼女」ができたかどうかどうするんだ！と脳内で自分同士を存分に戦わせた。

結果、臆病な自分はきれいさっぱりぶちのめして、今日この日を向かえることになった。

もう逃げない。

「幼なじみ」は今日で卒業する。

白いマフラーを首にしっかりと巻きつける。

玄関に備えつけてある鏡の前に立てば、いつもと同じ自分がいた。

泣くか笑うか。

一世一代の大勝負。

ローファーのつま先を鳴らしてから、思い切りドアを開ける。

「いってきます!」

冬晴れの青い空の元、私は確固たる決意を持って、歩みを進めた。

門の外に出ると、宥斗はもうすでに待っていた。

「おはよう、宥斗」

「…おう」

首にはお揃いの黒いマフラーが巻かれている。

宥斗と恋人になりたいなら、必然的に親衛隊のみなさんとの戦いもきつと避けられない。

正々堂々、お揃いで登校してやるっじゃないの！！

アドレナリンが分泌しすぎて、少々、いやだいがテンションのおかしい自分はすっかり忘れていた。

日曜日の別れ際、黙りこんだまま顔を上げず、宥斗の様子がおかしかったことを。

言いたいことだけ言って、自分はさっさと逃げ帰ってしまったことを。

もともと宥斗は寝起きが悪いため、朝は口数があまり多くない。

機嫌が悪い、とまではいかないがボーっとしていて、学校に着くまでそんな感じだ。

「してきたんだな、それ」

目線だけで私のマフラーを差せば、呟くように宥斗が言う。

「うん！！すごいあったかい！ありがとうね」

おかしなテンションそのままに、自分でもツッコみをいれなくなるほどきやっきゃしなから宥斗に言う。

すると宥斗は顔半分をマフラーに隠して、黙りこんでしまった。

今日も眠いのかな、まあいつものことだ、と特にその様子を気にせず、駅に着くと電車に乗り込む。

電車の中でも黙ったままの宥斗。ここまでだんまりの日は珍しいので、さすがに気になってきている思い返してみる。

そこでようやく私は気付いた。

気付いたけど、気付いたらなおさらなんと言って声を掛けていいのかわからず、気まずい無言が続く。

ついさっきまでは、いつものことだ、と思っていたのに、意識した途端に気まずくなる。厄介なものだ。

電車から降り、学校の最寄り駅に着く。そこから徒歩10分ほどで私達の学び舎が見えてくる。

駅から学校までは一本道で、そこは私達と同じ制服に身をつつんだ人々で溢れかえっている。

当然友達とも多くでくわし、その度に挨拶を返していく。

「おーっす！宥斗！」

「…いつてえ」

後ろから思い切りタックルをして宥斗をふっ飛ばす勇者。

金髪に染められた髪に明るい笑顔。この学校のTHEお調子者称号

を欲しいままにしている彼は、宥斗と同じクラスの山科くん^{やましな}。
この光景も毎朝のお約束だ。

だけど今日は気まずい空気をぶち破ってくれたので、心の中で拝んでおく。

アリガトウ、THEお調子者くん。いつもちよつと鬱陶しいと思つてごめんなさい。

「相変わらず朝は感じ悪いな〜！あ、飯島さんも、おはよ〜！」

「おはよう、山科くん」

飯島さん、とは私のことだ。

につこり微笑んでから挨拶を返すと、宥斗にもものすごい目で睨まれた。

「なに？」

さすがに何もしていないのに、そんな目で睨まれるのは心外だ。ちよつとムツとして返せば、宥斗は溜め息をついた。

「ん〜！！今日もかわいいね、飯島さん！こんな顔がいいだけの男はやめて、俺にしない！？」

そんな私達の空気を微塵も気にせず、山科くんは言う。

このへんが、彼のお調子者度合いを表しているであろう。毎度のことなので曖昧に笑って流しておく。

ちなみに宥斗と私が恋仲でないことはみんなが知っているのに、彼だけはしつこくそのこと指摘する。

「ん〜！？」

宥斗の真後ろからぐるっと回りこんで私達の前にやってきて、体を向き合わせる状態になり、何かをじいっと見ている。
なに、やってるんだろう。

意図がわからずにきよとん、としていると、出来れば今日私が触れてほしくなかった部分に、盛大に割って入ってくる。

「あれ〜!? あれあれ!? 君達のマフラーもしかしてお揃い!?」

右手に宥斗のマフラー、左手に私のマフラーを持って、やたら大きなアクションで叫ぶ。

「や、山科くんっ!!」

私は慌ててマフラーを引っ張るが、お調子者は手を離さない。
登校中の生徒達の注目をいっせいに集めてしまった。

あゝ勘弁してよ〜…。

「な〜に〜!? とつとつそういつ仲になっちゃったわけ!? この俺を差し置いて!! やるな〜!! このムツツリスケベ!!」

お調子者が宥斗の肩をドつく。

私の隣から、見たくもないほど怒ったオーラが漂ってくる。寒い〜!! 右半分が激しく寒い〜!!

極力そちらに目を向けないように歩くが、お調子者はいつまでたってもマフラーを引っ張っているため、私と宥斗はまるでリードのついた犬のようになっていた。

「バカが。離せ」

地を這うような低い声の宥斗。

怒ってますね!?

機嫌の悪い分当社比5割増で怒ってますよね!?

うゝ出来れば流れ弾は喰らいたくないっ!!

我が身かわいさに保身に走れども、当の本人であるお調子者は、宥斗が本気で怒っていることに気づいているのいないのかニヤニヤしている。

宥斗が思い切り手を振り払うと、やっと私も解放される。

「おゝ怖っ! やゝつとくつついたと思ったのに、その様子じゃ違っみたいだねえ」

明るい笑顔は変わらない。

これだけ怒れる宥斗を前にして、まだお調子者を崩さない彼は一体何者なのか。あ、お調子者が、とうまい具合にひとりノリツツこみを決める。どうしよう。ちょっと面白い。

思わず頬がニヤけるのを止められない。

ひとりツツコミが決まってニヤけるのアドレナリンのせいだ。今日の私はやっぱりおかしい。

「…なに笑ってんだよ」

脳内で結論づけている私に、怖い顔のまま宥斗が言う。

「へ? な、なんでもないよ?」

まさかひとりツッコミでウケていたとは言えず、無難に言葉を返す。やはり流れ弾はこちらにも飛んできたようだ。宥斗はそのまま私をじっと見つめる。

怖い。

怖いよ、宥斗くん。

脳内でなんとか言葉を振り絞ると、事もあるうかお調子者は「じゃあ後は若いおふたりで〜！」と、両手をポケットにつっこみ、スキップのような動きをしながら華麗に去って行ってしまった。

えええッ！？この空気のまま置いてくう！？怒らせたのはあんなのに！？

最早脳内でお調子者は「あんた」呼ばわり。だけどそれで充分だろう。拜んだ私の心を返せ、と少々いじ汚いことを思いながら周りを見渡せば、嵐はすでに過ぎ去った後。あちらこちらで、生徒たち（主に女の子）が私と宥斗を見てヒソヒソと声をたてていた。明らかに揃いのマフラーを指さしている子もいたりして、私は去って行ったお調子者を屋上から紐で逆さまに吊したくなった。

この5分10分の出来事が、今日が終わるまでには学校中に知れ渡っているのだろう。女の子のネットワークほど怖いものはない。そして、それだけ宥斗はこの学校では人気なのだ。ただの「幼なじみ」が、槍玉にあげられるほどに。

「…紗衣」

「はいつ!!」

思わず背筋を伸ばしてなんとも正しい返事をしてしまう。

「俺、今日放課後委員会だから」

「ん？ああ。アルバム委員ね」

卒業アルバム制作委員会。

推薦ですでに大学が決まっている人ばかりが選出されるその委員会は、その名の通り、卒業アルバムを作る委員会のことである。

クラスページをどうするかとか、アンケートを作って配布して、集計して。まあ言うなれば非常にめんどくさい委員会だ。

宥斗のクラスは比較的推薦の人が多くて、くじ引きで委員を決めらしい。1クラスにつき2人選出されるが、運の悪いことにそのくじ引きで大当たりを出してしまったと嘆いていた。もう一人も確か男の子だと聞いている。

先週その話を聞いた時、「男二人でアルバム委員じゃ大変だね」と

言ったら、「去年の卒業アルバムのクラスページ丸写しするから大丈夫」と、恐ろしいことを言っていた。それも男二人だからなせる裏技なのだろうか。

ちなみに私は、委員ではない。クラスにそういうのが好きな子達がいる、自ら立候補してくれたらしい。私からしたらめんどうさいことを好きだと言って引き受ける彼女達は、尊敬に値する。

「じゃあ今日は先に帰ってるね」

至極当然のことを言ってから、告白いっしょう…と今日伝えると決めたはいいが、今日のいつ言つかを全く決めていなかった自分の計画の甘さに、がっかりする。

「…今日は最初の集まりだから、すぐ終わるらしいんだけど」

怖い顔はどこかに消えて、わざと視線を合わさずに宥斗が言う。昨日のように、あからさまではないが、少し恥ずかしそうだ。

待ってる、ってことね。

「そっか。それなら待ってようかな」

クスクス笑いながら言うと、おでこを小突かれた。痛い。

「笑ってんじゃねえ。紗衣のくせに」

「ひとりで帰るの寂しいの？ ゆうちゃん」

「アホか！…ゆうちゃんはやめろ！」

わざと昔の愛称で呼べば、宥斗はおもしろいほどに反応を返す。機嫌はいつの間にか直ったようだ。全くいつまでも子供で困る。昨日思い知った自分の子供っぷりを棚にあげて、私も宥斗のことを言えたものでないが、気まずさのなくなった会話はやはり楽しい。

「幼なじみ」としてかわす会話には、もうカウントダウンがかかっている。

伝えてしまえば、もう元には戻れない。

多分、いつもの私なら、昨日の映画館での出来事や繋がれた手のことを思い出せば、宥斗の顔を見るたびに、自分の顔を（多分）真っ黒にさせていたに違いない。

腹を決めたおかげなのか。

宥斗の顔を見ても、いつものように接することができる。

門をくぐり、昇降口まで来ると、「帰り、どこで待ってる？」と宥斗が聞くので、「すぐに終わるなら自分の教室にいるよ」と答えた。毎朝宥斗と一緒にのはここまで。下駄箱が反対方向にあるので、ここから先は各自教室に向かう。

「じゃあまた帰りにね」と言って歩き始めた私の手を宥斗が引っ張る。

進行方向と反対に思い切り引っ張られた私は、バランスを保てなくて、宥斗の胸のあたりに後頭部を激突させた。すると私の左耳に、宥斗の囁き声が降ってくる。

「帰りはおてて繋いで帰ろうね。さっちゃん」

ポボンっ！！！！！！！！！

階段を登り、自分のクラスの教室を目指す。

私は1組で宥斗が7組。

見事に一番離れたふたつのクラスは同じ棟ではあるが階が違う。1組は2階。7組は3階だ。

2階に到着して、長い廊下を歩いていると、ものすごい形相でこちらを見ている数人の女の子が目に入る。

…宥斗親衛隊のみなさんだ。

視線で人を殺せる世界なら、私はとつくに死んでいる。

憎くてたまらない、というのを少しも隠さない様子に大放出中のアドレナリンが急激に減っていくのを感じた。

いや、頼む！！頑張ってくれアドレナリン！！ビビるな！！

脳内ツッコミをすることで気を紛らわしたが、視線は私が教室の中に入るまで追ってきた。

きつと見ていたのだろう。

つい先ほどの出来事だが、2階の廊下の窓からは昇降口が丸見えだし、階の違う宥斗は知らないだろうけど、親衛隊のみなさんはたいてい毎朝この場所で井戸端会議をされている。

お調子者が大勢の生徒の前でお揃いのマフラーを大袈裟に暴露したことも、もう伝わっているのだろうか。

どちらにしてもあの様子では近いうちに必ず何か起こるだろう。

ただ何も恐れることはない。

私は宿斗のことが好きなのだ。

彼女達と、なんの変わりがあるというのか。

直接対峙しなければならぬ状態になったら、はっきり言えばいいのだ。

今までみたいに、同じレベルになりたくない、なんてかっこつけてる場合じゃない。レベルなんて、いくらでも下げてやるんじゃないか。

もう無視なんかしてやらない。

もともと言われっぱなしやられっぱなしは性に合わないんだ。もうどうせ卒業だし、こうなったらとことん戦う!!!!!!

教室に入った途端に再び湧き上がる都合のいいアドレナリンを不安に思いつつ、自分の席に座る。

朝から疲れた。授業が始まるまで一休みしよう、と机につっぷす。朝のホームルームが終わり、授業開始まで後少しというその時。

私の耳に聞き慣れた声が飛び込んでくる。

「紗々衣!!!!!!」

「みのり。おはよ。1時間め間に合ったね」

「そおんなことどうでもいいのー!!!」

「なに?どうしたの?」

てた人はそんなんしてないの分かるでしょうがああ！！！！！！！！
ふざけんなあああ！！！！！！！！

ものすごい怒りに支配されてしまった私は、最後の一文でノートのパージを思わず破り潰してしまった。

隣の席の男の子が怯えたようにこちらを見つめているけど、気にしない。彼には悪いがそれどころじゃない。

ある程度噂になるであろう事は予想していた。お揃いのマフラーで登校する、ということとは、宥斗に気持ちを伝えると腹を決めた私の決意の証でもあった。

きれいさっぱりいなくなったはずの弱い自分が、また表れても打ち勝てるように。

その噂が今日中に学校中に広がるであろうことも予想していた。ところが蓋を開けてみれば、この有り様。

今日中どころか授業始まる前に広がったわ！！！！！！

後から後から怒りが湧いてくる。何にそんなに怒っているのが自分でもよくわからなかったが、とにもかくにも腹立たしい。

怒っているうちに、いつの間にか1時間めの授業は終わってしまった。手元には、真っ白なノートと、グツチャグチャに破かれた哀れなペー지의残骸。

そのすぐ後の休み時間に、みのは私の席に飛んできた。しかし、みのは今週週番で、今日休んでいる相方週番くんの分も、先生に細かな用事を次から次へ頼まれる。

4時間になると、みのりの眉間には紙でも挟めるんじゃないかと思うほど、シワが寄せられていて、全身から遠慮なく不機嫌オーラを放っていた。

その様子を見て思わず吹き出せば、怒りの気持ちがスーッと半減した。

みのりのことだ。私の話を聞きたいのに邪魔されることもそうだろうけど、噂が嘘だと分かった以上、とんでもない嘘っぱちが学校中に広まり、私がまた乏されることを分かっている、犯人探しにでも行きたくてうずうずしているに違いない。

私に起きた出来事を、いつも自分のことのように喜んだり、怒ったりしてくれるみのり。

最初に嫌がらせを受けた時も、私も知らないうちに犯人を見つけあげて、リーダー格の子に怒鳴りこみに行った。

ぶん殴ろうとしているみのりを止めたのは、彼女の被害者であるはずの私だ。

もちろん彼女のことを庇ったわけではなくて、こんなことでみのりが停学にでもなったら、それこそ彼女達の思うツボだと思ったが故の行動である。

とりあえず、この授業が終われば昼休み。一度私の所に来てから、犯人探しに向かうであろう親友をまずは体当たりしてでも止めなければ。

今回もきつと私以上に、怒ってくれているんだろう。
感謝せずにはいられない。

残っていた半分の怒りもきれいに消え去って、残ったのは、猛突直進型の親友に贈る感謝の念だけだった。

「紗衣！！お昼行くよ！！！」

「今日はどこにする？」

「視聴覚室！」

私の手を掴むと、みのりは教室のドアに向かって歩き出す。慌ててお弁当を掴んでから、後に行く。

途中、いつも一緒にお昼を食べている他の友達から、「紗衣とみり！今日は一緒しないの！？」と質問を投げかけられたが、みのりは止まる気配がなく、「今日は視聴覚室で食べるね！」と、私は引きずられながら言葉を返した。

みのり以外のクラスの女の子達も、噂のことはきつと聞いているはずなのに、誰も、何も聞かないで普通に接してくれた。ありがたい。

怒るみのりを見て、噂は嘘だということをきつとわかったのだろう。本当に、本当に、宥斗親衛隊のみなさんと同じクラスにならなくて良かった。毎日生きた心地がしなかったと思う。

視聴覚室に着くとすぐ、予想通りにみのりは声を上げた。

「あの噂、どこまでが本当のことなのっ！？」

大きな瞳が怒りで満ちている。みのりは、その性格とは裏腹に、外見はまるで小動物かのようにかわいらしい。

私よりもだいぶ低い身長に、まん丸の大きな瞳。四角くて大きめの前歯。アニメの声優さんのようなかわいい声、甘いしゃべり方。髪型はコロコロ変わるけど、今は前下がりのボブにしている。ちなみにギヤルっぽいメイクを好んでしていて、瞬きをする度に重ね付けされたつけまつげがバサバサ揺れる。

外見だけみれば、本当にかわいらしくて、すっぴんだとアイドルのような女の子なのだ。外見だけみれば、の話だが。

何せ膿んだピアスの傷を放置するような子なのだ。面倒くさがりでガサツ。その上短気で喧嘩っばやい。

だけどとても情に厚くて、実は涙もろくて、一度仲間と認めたら人にはとことん優しい。それ以外には恐ろしいほど容赦がないけど。

「えーと、お揃いのマフラー、までかな」

視聴覚室の机は横に長く、4人並んで座れるようになってる。

私は教室のちょうど真ん中の机に歩いて行き、椅子に腰を降ろす。

「それだけえ!?!」

みのりも私の隣に座り、持っていたお弁当を机に置く。私達はお弁当派で、学食にお世話になったことはほとんどない。

「やあーっとくつついたかと思ったのに!紗衣がそんな大胆なことをとは思えなかったけど、まああの男ならやりかねないし。あー!そんなのはどおーでも良くて、何がどうしたらあんな噂が広まるのお!?!」

みのりは私の顔を覗き込むと、怒りのオーラを継続させながら叫ぶ。

あの男、とは宥斗のことだろう。噂通りのことを、やりかねないと思っているのか。

それこそやめてくれ。恐ろしい。

「いや〜それ私も聞きたいよねえ」

前半は無視して、後半の質問のみに答える。ヘラツと笑いながらお弁当を広げて、「いただきます」のポーズを取りながら私は言った。

「さあ〜え〜!!!!!!ちよつとは怒りなよ!!!何ヘラヘラしてるのっ!?!」

キツと睨みつけられるけど、持っていた箸で自分のお弁当箱から卵焼きを素早く掴み、みよりの口にいれてやれば一時的に顔がほんわか笑顔に変わる。

「紗衣ママの卵焼き相変わらずおいし〜っ!」

「そう?よかった」

みよりは私の母の料理が大好きで、それは彼女の弱点でもある。どんなに怒っていても母の料理を食べると一時的に笑顔になる。

また怒った顔に戻る前に、私は今日までのことを説明した。

日曜日に宥斗と映画に行ったこと、マフラーがお揃いなわけ、今朝の登校時の出来事、昇降口での宥斗のイジワル。

色々話しづらいアレコレは割合したが、それ以外は全部話した。もちろん、宥斗への告白を決心したことも。

みのりは最後まで口を挟むことなく、相づちを打ちながら聞いてくれた。

「…と、いうことで、犯人探しなんてしなくていいからね」

「ええ！？なんでわかったのっ!？」

びっくりして、丸い目をさらにまん丸にさせるみのりに笑いながら返す。やはり、これも予想通りだ。

「大丈夫だよ、私は。みのりが私以上に怒ってくれたから、もう気が済んじゃった」

「でもお〜…」

まだ納得のいかない様子のみのりに、私は話している間も食べ続けていた、口いっぱいの母特製おにぎりを飲み込んでから言葉を続ける。

「昇降口にいた人みんな見てたんだよ？誰が言い出したかなんてわからないって」

「まあ、そうか…」

「でもね、みのりの気持ち、嬉しい。ありがとう」

微笑んで感謝の意を述べれば、みのりはしゅしゅといった感じで頷く。

「とつとつ、言つんだね」

「うん。「幼なじみ」は、もう終わりにする」

「そっか…」

「うん」

みのりは自分のお弁当に全然手をつけていない。食べながら話していた私はもう食べ終わりそうだというのに。

「振られたらなくさめてよね」

最後の卵焼きを口に放り込みながら、あまり深刻にならないように心掛けて言った。

「大丈夫だよ」

即答でみのりが答えを返すと、そのまま言葉を続ける。

「ちょっとした、おまじないもしてあるしい」

「おまじない？」

お弁当を食べ終わり、食後のお茶を飲んでいた私は怪訝な言葉を問い返す。おまじない、って一体何したんだろう。

「そお。でも元々必要のないおまじないだけどねえ。でもあの男がようやく態度で示しだしたみたいだし、かなり効いてると見た」

言ってる意味をさっぱりわからない私はその後何回も、「おまじない」について聞いてみたけど、結局みのりは教えてくれなかった。

「紗衣」

「ん？」

「頑張ってるね」

「…ん。ありがとう」

そのあとすぐに、チャイムが鳴り響いて、昼休みは終わった。

みのりはほとんどお弁当を食べていなかった。「お昼も食べていないのに5時間めの体育なんてできる気がしない」と、ひとり保健室に向かった。

私のせいでお昼食べられなくてごめん、と謝ると、「単に昼寝の口実」だと、笑ってくれた。

放課後が近づいてくる。

今日は宥斗が委員会で、その後教室に迎えにくる。学校だといつ人が来るかわからない。今日大層な噂が広まってしまった以上、これ以上の話題提供はもう十分だった。

一緒に帰って、夕飯を作る前に宥斗の家に行こう。

そしてそこで、告白をしよう。

やっと立った告白の計画。

大丈夫。行動的にはいつもと全然違うことをするわけじゃない。宥斗の家に行く時間が早まるだけ。

何も怖くない。大丈夫だ。

具体的になつてきた計画に緊張してきた私は、必死で自分をなだめる。

そして静かな高揚感と共に、いよいよ放課後を向かえた。

「紗衣くバイバイ」

「バイバイ」

帰りのホームルームも終わり、みんなそれぞれ教室を出て行く。

帰宅する人もいれば、図書室で勉強をしていく人もいる。

推薦で合格が決まっている人の中には、部活に顔をだしている者もあるようだ。

机に座ったままの私は次から次に声を掛けられて、そのひとつひとつに手を振りながら返事をしていく。

「紗衣！まだ帰らないの？」

振り向けば、すっかり帰り支度を整えたみのりが自分の席からこちらに向かいながら言った。

「今日、宥斗が委員会なんだ。すぐ終わるらしいから待ってようと
思ってた」

「へえく谷口卒アル委員なんだあ」

「くじで当たっちゃったんだって」

谷口は、宥斗の名字。

この学校ではアイドルと化しているのが原因なのか、宥斗を呼び捨

てにする人は、私以外の女の子ではみのりしかない。いや、もしかしたら他にもいるのかもしれないけど、私の知る範囲ではみのりしかないかった。

「じゃああたしも一緒に待ってるよお」

そう言いながら、みのりは私の席の前の席に座り、バックを肩から降ろす。

「大丈夫だよ。すぐ終わるって言ってたし。矢口くんと一緒に帰るんでしょ？」

「紗衣の方が優先だもん。啓太も一緒に話して待ってればあつとゆう間だよお」

「でも…」

「みつのりー！」

噂をすれば、みのりの彼氏である矢口啓太くんが、いつものようにみのりを迎えに来た。その後ろにはなぜか宥斗もいる。彼らは同じクラスで仲がいい。しかし、私と宥斗は帰りも昇降口で待ち合わせているので、一緒に迎えに来ることはまずない。しかも今日宥斗は委員会のはずだ。

「啓太あ。紗衣、谷口が委員会終わるまで待ってるんだって。一緒に待ってたいんだけどいい？」

一足早く、みのりが矢口くんに声を掛ける。

「全然いいよ！紗衣ちゃん、俺も一緒にでもいいかな？」

ニコニコ笑いながら、矢口くんが言う。矢口くんは本当に温厚な性格で、またその性格が顔に表れている。そしてその優しい笑顔に私は毎日こっさり癒されている。

「そんな話になってるのか」

後から教室に入ってきた宥斗が言う。なにそのうんざり顔。

「あゝら宥斗様。紗衣を待たせるなんていいご身分ねえ」

みのりがわざとらしく、宥斗がその呼び方を嫌がっているのを知っていて言う。「宥斗様」は、親衛隊のみなさんの中での、宥斗のあだ名だ。一部面白がっている人もいるようだが、本気でそう呼んでいる人もいるらしい。恐ろしい話だ。

「うるせえ」

宥斗が吐き捨てるように言うと、みのりを睨みつける。もちろんみのりもそれを受けてたまったようで、ふたりの間にバチバチと火花が散る。

このふたりはいつもこんな感じで、なぜかよくわからないが仲が悪い。

「宥斗ー俺のみのりを睨むのはやめてくれる？」

「お前のだって言うなら、このうるさい女をどうにかしてくれ」

「何よお！へタレのくせにい！」

なぜこんなにもよっちゃ触っちゃ喧嘩になるのだろうか。まあよほど相性が悪いんだろう。今日も喧嘩が激化しないうちに止めなければ、と私は口を開いた。

「まあまあまあ。宥斗はどうしたの？委員会は？」

「…今から行く。すぐ終わるらしいけど、もし長引いたら先に帰ってていいからな」

それを言うためにわざわざ来てくれたのか。私が「いいよ。待ってるから」と伝えれば、宥斗は嬉しそうに微笑んだ。

「じゃあもし遅くなりそうだったら、図書室にでもいて。ここ寒いだろ」

「あ、そうだね。もうストーブ消えちゃったし」

うちの高校の暖房器具は、昔ながらの石油ストーブだ。銀色のパイプが天井まで伸びていて、つける時はマッチを使わなければならぬ。帰りのホームルームのあと、担任がストーブを消してから教室を出て行く。この寒い教室で長い時間待つのは確かに辛いかもしれない。図書室なら閉館までストーブが焚かれているし、宥斗の提案は最もだった。

「あ〜やだやあだ〜。見てらんなあ〜い」

「みのりっ！そんなこと言っちゃダメだよ！宥斗の貴重なデレシーンなんだからっ」

「そういうことだからお前らは帰れば」

…何がそういうことなんだろうか。さっそく話をまとめにかかっている宥斗に、みのりが食ってかかる。

「あなたにそんなこと指図される覚えはない！！あたしが！紗衣と待ってるって決めたんだから！！」

「はいはいみのりちゃん落ち着いて〜。宥斗が怒っちゃうから今日は帰るよ〜」

「はい立って」、と矢口くんがみのりを無理やり立たせる。

そのまま抱っこされたみたいに拘束されたみのりはギャーギャー喚きながら教室を後にする。

矢口くんはみのりを抱えたまま、教室を出る前に、「宥斗、紗衣ちゃんまた明日ね」と実に爽やかに笑って帰って行った。

その様子を私が呆然と見てみると、「じゃあ俺も行くから」と、宥斗も教室を出て行く。

突然ひとりになった私は、キョロキョロ周りを見渡すと、教室内に残っているのもやはり私ひとりで、なんだかもの寂しい気分になった。

時計を見れば3時半。

そのまま椅子から立ち上がり、窓際まで足を進めてから下を見下ろす。

校庭には、すでに活動を始めた運動部がしひめきあっている。サッ

カー部、野球部、ソフトボール部……。そして校庭の脇に植えられている木の下には、落ち葉を片付ける公務さん。彼は相変わらず働き者だ。

もう少し視界を外に向ければ、お母さんと仲良く手をつないで校庭の外を通り過ぎる幼稚園児達が見えた。この時間は、ちょうどお迎えの時間らしい。みんな楽しそうに笑い合っていて、見ているこっちまで笑顔になる。

この慣れ親しんだ景色とも、もうすぐお別れ。思う存分に景色を堪能しているところに、怖いくらいに殺気だった声が掛けられる。

「飯島さん」

ゆっくりと声のする方に顔を向ければ、予想通りの人物が立っていた。

やっぱり来たか。

来ることはわかっていた。彼女は宥斗と同じクラスだし、宥斗がアルバム制作委員だということももちろん知っているだろう。そして、今日は委員会があることも。

きっと宥斗のいない時間を狙って来たに違いない。

こうなることはだいたいわかっていて、私は今日教室で宥斗を待つことにした。もちろん寒くなったら図書室に移動しようとは思っていたけど、そのまえに彼女が表れることは、私の中でほぼ確信に近かった。

そうして今、それが確信になる。

「…何か用？相沢さん」

No.20 (後書き)

ここまで読んで頂いてありがとうございます。
いよいよ対決です。

予想以上に長い話になってしまいましたが、最後まで、紗衣と宥斗を見守って頂けると嬉しいです。よろしく願います。

そしてみなさま、メリークリスマス！

素敵なクリスマスをお過ごしください！

相沢多香子、それが彼女の名前。宥斗親衛隊のリーダーであり、私への幼稚な嫌がらせを働いた張本人。みのりに怒鳴りこまれたのも、怒った宥斗に一喝されたのも、彼女だ。

「ちょっと話があるの。いい？」

「どうぞ」

教室後方のドア近くに立っていた彼女は、私の返事を聞くと、私の真正面になるように場所を選び、ちょうど教室の真ん中あたりまでゆっくりと歩いてきた。一度立ち止まると、再度歩みを進めて、そのまま私の前に立つ。

目の前の彼女のその表情は、出来ればお目にかかりたくないものだった。

「お前が憎くて憎くてたまらない」

そう、目が物語っている。眉根を限界まで寄せ、上目づかいに私を睨みつける。両の手は下げられていたが、拳を握ったその手には明らかに力が込められていた。

「...どういづつもり？」

その表情のまま、微動だにもせず相沢さんが口を開く。きつと怒りに脳内を支配されているのだろう。その声は震えていた。

「なんのこと？」

私は毅然とした態度で対する。私は何も悪いことなどしていない。私の脳内に放出されたアドレナリンは、間違いなく今日最高数値を叩き出していた。

「……っ！谷口くんのごことに決まってるじゃない！同じマフラーなんて巻いて登校してきて、どういふつもり!?」

私は、彼女たちに何を言われても、「無視」という名の防御壁を押し通してきた。そんな私が、毅然と言い放ったことがよほどお気に召さなかったようだ。

怒鳴る、というよりも悲鳴に近かった。

「お揃い」という言葉は使わないのが彼女らしい。

「それを、私が相沢さんに話す筋合いが、どこにあるの?」

「私は谷口くんのごことが好きなの!!!知る権利がある!!!」

どんな理屈だよ、アホか。

思わず脳内でツツこんでしまった。嫌がらせも幼稚だったけど、彼女の頭も十分幼稚なようだ。当たり前か。その頭がああ嫌がらせを生み出したんだから。

「それこそ私にも宥斗にも関係のない話みただけだ」

「偉そうに言わないでよ!!!あんなにかただの幼なじみのくせに!!!」

「ただの幼なじみのくせに」。前はこの言葉に多少傷付いていた。そう言われたら何も言い返せなかった。もとより返すつもりもなかったけど。

でも今は違う。私はもう決めている。「幼なじみ」は今日限りで卒業すると。

「だから？」

そう返せば、相沢さんは困惑の色をその顔に浮かべた。

彼女の中での台詞は、私にダメージを一番与えられるものだと思っ
っているだろう。まあ間違っ
てはいないけど。

「ただの幼なじみが同じマフラーして、何がそんなに気に入らないの？私達が付き合うことにでもなれば、あなたは満足？」

挑発するように言った。もちろんわざとだ。刹那、相沢さんの顔は真っ赤に染まり、目にはうっすら涙を浮かべ始めた。

「そんなの絶対に許さない！！！！！！」

金切り声が私の鼓膜を刺激する。彼女は勝手だ。いつだって勝手だ。それがいつまでも通ると思うな。

「相沢さんに、その権利はあるの？あなたと宥斗は恋人でもなんでもない。そんな制限が、本当にできると思ってる？」

「パアアン！！！！！！」

私たち以外誰もいない教室内に乾いた音が響き渡る。

叩かれたのだ。それも思い切り。

荒い息遣いのせいで、彼女の肩は上下に揺れていた。言葉で勝てなければ暴力か。いつそ滑稽だ。お約束すぎる。

「…満足した？」

妙に冷静な気持ちだった。こんなことくらいで気が済むなら、いくらでもすれればいい。

それでも私が宥斗を想う気持ちは、変わらない。変えられないのだ。

「うつつ……っ！！」

相沢さんは下を向き、その瞳から、涙を滝のように流し始めた。文字通り滝のように頬をつたい、流れていく。

とうとう泣いてしまった。誰かを泣かせたのは人生で初めてだった。泣かせた、というよりは勝手に泣いたような気がするが

「あんだ…なんかに…ッ、」

何か言おうとしているが、嗚咽がまじって聞き取れなかった。

落ち着いてからしゃべればいいのに、と大分冷たい感想を持つ。

彼女が泣いているのを見ても、私の心は痛まなかった。そこまでお人好しじゃない。

嫌がらせを受けたのは期間にして約半年。こちらが黙っているのをいいことに、どんどんエスカレートしていった。まあ、だからこそ、みのりと宥斗にバレてしまったのだが。詰めが甘いとしか言いようがない。

無視を決め込んでいたけど、私だってそれで傷つかないほど鉄壁の心は持っていない。何度もひとりで泣いたし、学校に行くのが億劫になったこともある。

それを全部、他の親衛隊の子達に指示し、率先してやっていたのが

彼女だ。

ふざけるな。泣きたいのはこっちだ。

「あんだなんかに…ッ、わたしの、気持ちなんて…っ！！！！」

泣きながら叫ぶ姿は、まるでなにかに取り憑かれているようだった。そのままの状態で叫び続ける。

「いつつも澄ました顔して…っ、谷口くんの隣にいるのが当然のような顔して！彼女でもないのに、谷口くんの笑顔を独り占めして…ッ、うつ…隣に、住んでるってだけで！！！！どうしてあんだなの！？わたしの方が谷口くんのこと、ずっとずっと好きなのに！！！！」

「……………っ」

言葉に詰まってしまった。

そんな私のことなんか全く気づいていないのだろう。私を涙でぐしゃぐしゃになつた顔で見つめて、何かに耐えるように言う。

「あんたにはわからないでしょうね。姿を見れるだけで嬉しい気持ち…おはようって声を掛けて、返事が返ってきた時の飛び跳ねるような気持ち。毎日登下校を一緒にして、当たり前のように谷口くんの家に入り浸ってるあんたには、絶対にわからない！！！！」

「……………。」

完全に言い返せなくなった。

確かに私にとって、宥斗が隣にいることは、当たり前のことなのだ。産まれた時からずっと一緒に、離れていた時間などない。話しかけ

れば返事が返ってくるのだって、当然のこと。笑顔を見ると嬉しくなる気持ちはもちろんあるが、きつと彼女のそれとは違う。些細なことでも気持ちは動かす彼女の「好き」の方が私の持っているものよりも大きいのだろうか。

「本当にやめてよ！！谷口くんの傍に、我が物顔で立たないで……！！！！！！ではないとわたし、あなたに何をするかわからない……！！！！」

もし、そうだとしても……！！

「それでも、私だって宥斗のことが好きなの。何をされても、自分から宥斗の傍を離れることなんてできない」

私のその言葉を聞くと、相沢さんは驚いたように目を見開いた。そのまま手でぐしゃぐしゃの顔を拭くと、下唇を噛み締めて黙った。無言の時間が続く。

どれくらいそうしていただろうか。彼女はひとつため息をもらすと、入ってきた時と同じようにゆっくりとした動作で、私の前から姿を消した。

廊下を歩く足音も遠ざかり聞こえなくなると、膝がカクンと音をたて、そのまま床に崩れ落ちる。

……疲れた。憎しみを真っ向から受け取るのは、やっぱりしんどい。そうしたままいると、先ほどの相沢さんの言葉が脳内を駆け巡る。

「隣に住んでるだけ」。その通りだ。私は運良く、産まれた時から隣に住んでいるだけなのだ。

相沢さんの気持ちは、きつと私には分からない。

ただ、もしこれが逆の立場だったら、と思うだけで背筋が寒くなる。

そうだったら私は、宥斗の姿を見かけるだけで喜んだり、宥斗に挨拶を返されたことを飛び跳ねて嬉しがったりするのだろうか。彼女と同じように、目障りな幼なじみを憎く思うのだろうか。そんなことにはならない、なんて保障はもちろんどこにもない。

ずっと、なぜここまで敵意をもたれるのかなんて、知りたくもなかった。そんな理由を理解したところで、今までされて来たことは消えるわけじゃないし、ましてやそれを肯定することなんてできない。だけど、卒業を間近に控えて、よくやく彼女の気持ちをしただけ知って、もちろん、理解はしていないけれど思うところぐらいはある。

彼女も私と同じように、恐れていたのだ。宥斗に、大切な誰かができてしまうのを。

そしていつも宥斗と一緒にいる目障りな私を、彼女は一番危険視していたのだろう。敬遠のつもりで始めたことが、エスカレートし、結局宥斗にも嫌われてしまったわけだ。そりゃ原因である私は憎くて憎くてたまらないはずだ。

「なるほど…納得…」

つい声に出して呟けば、ひっぱたかれた左頬が今更ジンジンと痛みはじめた。そつとそこに触れてみると、とんでもない激痛が走る。腫れているし、熱も持っている。

早く冷やさないと顔の形変わっちゃうかも、と思っても、今すぐもっここから立ち上がる元気は私にはなかった。

私には分からない、相沢さんの宥斗への想いは、確かに私の心に響いた。それは嘘じゃない。

だけど、それでも私は宥斗が好きだと、強く思った。彼女の気持ちを知ったとしても、簡単に引き下がってなどやれない。

皮肉なもので、宥斗に想いを伝えようという気持ちはより一層強くなった。

しかし、何せ疲れてしまった。

教室内はすっかり冷え込んでいて、床に直接座っているお尻が冷たい。頬を冷やす氷を保健室にもらいに行かなきゃならないし、そのあとは図書室に移動しなければ。もう少し休んでからいろいろ動く。

そう思って目を閉じた瞬間

「紗衣!!!!!!!!!!」

まずい。と私は瞬時に思った。

誰が見ても叩かれたと分かる類。

持てる体力は全て費やしてしまったので、きっと顔もポーっとして
いるだろう。

走ってきたのか、息が切れている宥斗は一目散に私のところまで駆
け寄ると、同じようにしゃがみこみ、私の顔を覗きこんでから、そ
の表情を驚愕のものへと変える。

「…何があつた？」

今朝と同じか、それよりも低い声。こちらを見つめる宥斗の瞳には
はつきりと怒りの色が見えてとれた。

「え、と。その……。」

ダメだ。うまい言い訳がひとつも思い付かない。

正直に「相沢さんに殴られました」なんて口が避けても言えない。

宥斗は自分のせいで私が傷つけられるのを、あれほど気にしていた
じゃないか。

「うーんと…。ボ、ボールがね！窓から外を見てたら飛」

「相沢だな？」

やっこの思いで発見した言い訳を思い切り遮られた。

私の答えを待つことはせず、宥斗は私を引っ張って立ち上がらせる

それを理解した時には、宥斗から次の言葉が発せられる。

「なんかあったら俺に話せて何度も言っただろ!!! そんなに頼りにならねえか!？」

頭ごなしに怒鳴られて、情けないことに目にじんわり涙が浮かんできた。だけど、なんとか泣かないようにごしごしと目をこする。

「相沢さんのところに行くのはやめて欲しい。お願いだから」

質問には答えずに再度告げれば、宥斗は悲しそうに顔を歪ませた。だけど怒りはまだあるのだろう。声はまだ怒っていた。

「お前がこんな目に合って、黙ってられるわけねえだろ」

「私は宥斗にそんなこと頼んでない!!!!!!」

思わず心のまま叫んでいた。

もっと違う言い回しがあっただろう。頼りにされていないと嘆く宥斗に追い討ちをかけるようなことを言ってしまった。

「そうかよ……」

私の手を乱暴に振り払うと、宥斗はそのまま振り向かず歩き出す。

「ゆ、宥斗っ!?!」

身勝手でも、もう一度、どうしても立ち止まって欲しくて、すべての思いを乗せてその名前を呼ぶ。

だけど、宥斗が歩みを止めることはなかった。

私の声なんて聞こえてもいないように、廊下へ出ると、そのまま私を置いて行ってしまふ。必死に足を動かして私も廊下へ出たけど、宥斗の背中がどんどん小さくなり、やがて見えなくなった。

「ゆっ、とぉ…ッ」

私の泣き声は廊下で小さく響いて、あっという間に消えた。

行ってしまった。振り向かずに。あの宥斗が怒鳴った。意地悪ですぐ不機嫌になるけど、怒鳴られた事は過去を振り返っても一度もない。

怒らせてしまった。それとも、呆れたのだろうか。あまりにも身勝手な私に。

敵に塩を送るわけではないが、あんなに宥斗のことを想っている相沢さんが、宥斗にあの勢いで怒られたら、精神的に崩れてしまいそうな気がしたのだ。彼女のやり方は汚いけど、十分なほどに傷ついているのは今日話してわかった。私が隣にいただけで、傷つくのだ。堪らないだろう。

それにこれは私達の問題。もちろん宥斗が関わっていることは確かだが、それでも私と相沢さんの戦いなのだ。

宥斗の悲しそうに歪む顔が脳裏をかすめる。

本当は、言いたかった。

相沢さんにいくら叩かれようが、そんなことは宥斗の傍にいられるためなら大したことではないと。

伝えたかった。あなたが大好きだと。

だけど、あの状態で言うのは、今考えても躊躇いがあった。自分の気持ち的にもそうだけど、あんなに怒ってる宥斗にそれを言うのは、それこそ不謹慎な気がしたのだ。それでも言えば良かったのかな…。

ようやく気持ちを伝える覚悟をしたのに。

今日、言おう、そう決心したのに。

そんなのは私の都合で、誰にも何にもは関係ない。分かっているけど…！

涙がとめどなく溢れてくる。

まだ宥斗を失ったわけではない。宥斗は怒って帰ってしまっただけだ。

わかっているのに、身勝手な喪失感を感じる度、後から後から涙が流れて止まらない。

帰ろう。帰って夕飯を作らなきゃ。

唐突に、そう思った。

みんな夕飯がないと困るだろう。私の役目なのだ。特に父は、今日出張から帰ってくる。私の手作りの夕飯を楽しみにしているだろう。スーパーで買い物をしてから帰ろう。

あっという間に次の行動を決めた私は、小走りで窓際の席までカバンを取り行くと、それをひっ掴んで教室を後にした。

その思考こそが、脳内がこれ以上喪失感を味わいたくないがために作り出した、卑怯な手段だとも気付かずに。

No. 24 (前書き)

紗衣が思考止めちゃったので、文章が淡々とします。
もともと読みづらい小説がさらに読みづらくなります。申し訳あり
ません。

スーパーで買い物をしてから家に帰った。

「お父さんが楽しみにしているから」と理由付けで、ひたすら料理を作り続けた。手を動かしていれば、余計なことは考えずにすむ。

途中で、母が帰ってきた。今日はずいぶん早い。聞くと、出張が今日までの予定だったので、大してやることがなかったのだという。多分母は、私の腫れた頬と、テーブルいっぱいに並べられた料理の数々を見てすぐに気付いたと思う。

だけど何も聞かれなかった。普段は冷やかすのが大好きで、遠慮なく質問をぶつけてくるくせに、こういう時はいつも、母は何も聞かないでいてくれる。

7時になって、いつもなら宥斗に夕飯を届けに行く時間だということに気付いた。だけど、どんな顔をして会いに行けばいいのかわからなかった。謝って、仕切り直して、気持ちを伝えるべきなのはわかってはいたけど、今の私には無理だった。

結局、宥斗家族の料理が乗せてあるお盆を持ったまま固まっていた私を見かねて、母が持つて行ってくれた。

だけど、帰ってきた母の手には、置いてきたはず料理がそのままだ残っていた。

宥斗が家にいないらしい。母が、携帯に電話しても電源が入ってなかった、と心配そうにしている。

こんな事も初めてだ。宥斗は夕飯はいらさない日は、必ず前持って連絡をくれる。一応自分の携帯で着信の確認をしたが、当然そこに履歴はなかった。

そのあと、私は努めて明るく振る舞ったけど、うまくできていた自信はない。

そんな私の様子に帰宅した父も気付いたようだけど、「紗衣ちゃんが話したくなったら、いつでも聞くからね」と言ってくれた。

そして父と母は、テーブルいっぱい料理を、おいしいおいしいと言いながら、残らず平らげてくれた。

その夜、私は頬にアイスノンを巻いてから、早い時間から泥のように眠った。考えなきゃいけないことも、やらなきゃいけないこともたくさんあるというのに、脳がそれを放棄した。

夢の中に宥斗が出てきて、楽しそうに笑っていた。その顔を見て、夢の中の私は泣きそうになっていた。

そして火曜日の朝。

起きてすぐ鏡を見れば、左頬の赤みと腫れはだいぶ引いていた。近くでよく見れば少し腫れが残っているのはわかるけど、髪の毛で隠れて見えないだろうし、第一そんなに近づいてまで私の顔を見る人はいない。

これなら大丈夫そうだ。

今朝一番で宥斗に謝ろうと心に誓った。

宥斗もきつと、謝れば許してくれる。だけど、そんな甘い考えはすぐに打ち砕かれた。

いくら待っても、宥斗は来なかった。次の電車を逃したら遅刻、という時間にまでなって、宥斗の家のチャイムを鳴らせばおばちゃんが出てきて、「あれ？紗衣ちゃん！？宥斗ならずいぶん早くに出て行ったよ」と、私がまだ家の前にいたことを驚いていた。

当然、私に連絡はない。おばちゃんに短く挨拶してから急いで学校に向かう。

遅刻ギリギリに教室に駆け込んだのは久しぶりだった。階の違う宥斗とは、日中会うことはほとんどない。この日も例外になく、授業が終わるまで宥斗の姿を見ることはなかった。

放課後になって、昇降口で待っていると、宥斗親衛隊のみなさんが横を通り過ぎた。

「宥斗様なら、とつくに帰ったのにいつまで待ってるんだろ」笑える〜!!」と言ってる。

私は慌てて宥斗の下駄箱を覗いて、そこにはもう上履きがあることを確認した。

連絡を、3回もし忘れることはないだろう。

私はもうその事実から逃げられなくなった。

宥斗が、私を避けている。

それほどまでに怒らせてしまったのだ。

いや、もう話したくないほど、嫌われてしまったのかもしれない。

そのことを、ようやく認めてから、私の脳内は再び動き出した。

No. 25 (前書き)

動き出したので戻ります。

宥斗の下駄箱から離れて、自分の下駄箱へ向かう。目に浮かんだ涙のせいで、視界が悪い。でもこんな所で泣いたら、またどんな噂が流れるかわからない。

脳内が動き出した途端、涙がでるなんて。本当に厄介だ。眉を寄せ、唇を噛み、それに耐えながら歩いていると、みのりと矢口くんが心配そうにこちらを見ているのに気付いく。

みのりは今日お昼過ぎに登校してきたので、私と宥斗が別々に学校に来たことを知らなかった。

5、6時間めは続けて選択授業で、みのりとは科目も違ったため話をする時間もなく。帰りのホームルームの後は、宥斗のことが気になって、帰りの挨拶もそこに教室を出てきてしまった。

いろいろ相談にのってもらっているのに、思考を止めていた私は、昨日あった出来事を何ひとつ話せていなかった。

だけど、今みのりと話したら絶対に泣いてしまう。矢口くんにも迷惑がかかる。家に帰ってから、電話で話そう。

そう決めてから、「大丈夫だよ」という想いをこめて微笑んで隣を通り過ぎると、みのりが私の腕で掴んだ。

「紗衣っ」

みのりの大きな瞳にも涙がたまっていた。心配そうな顔。

それを見ていた矢口くんは、そっとみのりの肩を叩いて、ひとりでその場を立ち去った。

「み…のり…」

泣き出しそうになった私の手を繋ぎ直すと、みのりは歩みを進めた。私も、それにふらつきながらついていく。

着いた先は同じみの視聴覚室。

部活にも使われていないこの部屋には、授業以外で立ち寄って誰かと遭遇したことがない。

そのままいつもお昼をふたりで食べる席まで引つ張っていかれる。

先にみのりが座ってから、私も隣に腰を落ち着けた。

私の左側に座ったみのりは、私の顔を見て声を上げる。

「紗衣っ！！なんかほっぺ腫れてなあい!？」

気づかれてしまった。この距離ならわからないだろうと思っていたけど、さすがみのりだ。目ざとい。

「やっぱまだ腫れてるか…!？」

「まさか、相沢!？」

「まあ、うん。でも私もやり返ししちゃったようなものだから」

「おあいこなの」と言って笑うと、みのりの顔がキラキラ輝く。きつと何か勘違いしているに違いない。やめなさい。そこでキラキラしちゃダメだつてば。人として。

「紗衣も殴り返したのお!？やっつるじゃ〜ん!…!？」

やっぱり。私は瞬時に首を振りそれに答える。というか、ツッコむ。

「いや、殴ってはいないから」

「なあんだ。残念っ」

そう言う割にはみのりは嬉しそうに笑った。

「本当に殴り返してやればよかったのにい。あたしが殴り込みに行つたあとも、散々いろんな噂流されて、ストレスたまってるでしょ？」

「まあ、疲れない、と言つたら嘘になるかな…」

「そりやそーだよつ。もしかして、あたしたちが帰ってから相沢来たのお？」

「ん。きつと来るだろうなつて思ってたら、あんまり驚かなかつたけどね」

それからみのりに、相沢さんとの戦いの様子をその時の私の心情を交えて、実況中継のように話した。

みのりはそれを、「はあ!？」、「どんだけ頭弱いのお」、「上から目線むかつくつ」と、なんとも面白いコメント付きの合図を打ちながら聞いてくれた。

「はあ〜。すっごいガチバトルだったんだねえ!! 紗衣、頑張ったねえ〜」

えらい、えらいと、頭を撫でてくれる。

なんだかくすぐつたい。

「完全に張り切りすぎたよね…。」

「相沢は自分が一番な人間なんだから、はつきり言わなきゃわかないよっ！もつと泣かせてやれば良かったのに！！いつそ殴ればよかったのにいつ！！むしろあたしが殴りたあーいつ！！紗衣のキレイな顔に傷つけやがってえ〜！！」

物騒なことを言うのはやめてください、みのりさん。あんたが言う
とシヤレになりません。

心底悔しそうにするのを見て、本当に殴りに行ったらどうしよう、
と不安になるとそれに気づいたらしいみのりが言った。

「心配しなくても大丈夫〜っ。紗衣がちゃんと自分で喧嘩買ったん
なら、あたしは手を出さずに見守るよお〜」

みのりは、殴る、と言ったら、本当にすぐ殴りに行ってしまっ
とりあえず今回はその心配がなさそうなので安心した。

「紗衣はさあ、どんな時でもまず相手の立場に立って物事考えるで
しょお？だからきつと自分がもし相沢の立場だったらって考えて心
苦しくなっちゃったわけよねえ？」

「んー…隣に住んでるって理由だけで、宥斗の近くにいるのは事実
だから、ね。相沢さんが感じるような些細な幸せは、私にとっては
当たり前で。そんなところまで幸せに感じるなんて、相沢さんそれ
ほど宥斗のことが好きなんだなって思ったの」

「あつまーいつ〜！！」

ズビシッと、みのりが人差し指をこちらに向けて叫ぶ。なんてお約束なポーズ。椅子から立ち上がると、みのりは言葉を続ける。

「いいい！？紗衣と谷口は幼なじみのっ！そんな自分でも決められない環境をいちいちバカみたいに妬んでる相沢が自分勝手なんだから、そんなのは紗衣が気に病むことじゃないっ！バカは相手にしないっ！だけど時々やり返す！調子こいてめんどーだからねっ！それから、好きに小さいも大きいもなあ〜いつ！じゃあ聞くけど、紗衣は谷口のどこが好きなのっ！？」

はー、なるほど。みのりの見解だとそうなるわけか。

若干ぶっそうで、だいぶ失礼な発言があつたけど気にしない。

聞く人によつて考え方は全然違うんだなあ。相沢さんも、みのりの手にかかれば「自分勝手なバカ」で片付けられてしまうわけだ。それもまたいかなものか。

ひとり思考にふけっついていて、後半部分はあまり聞いていなかった私に、「どこが好きなのっ！？」と再び怒声が飛ぶ。

みのりのアクセルが全開だ。ある意味相沢さんより怖い。私は慌てて、宥斗の好きなところを思い返す。

「え〜っつと。んーと…。」

そんなこと、よくよく考えたことなどなかった私は、ずいぶん長い間唸っていたようだ。ふと隣を見た時には、立ち上がっていたはずのみのりはいつの間にか座っついていて、携帯をいじりだしていた。

「ちょっと！！質問しといてなに携帯見てんのっ！？」

ずいぶんな扱いに思わずツツコミを入れると、みのりはテヘツと笑った。

「いやあ、悩んでるみたいだからあ、時間潰してた。まとまった？」

にっこり笑うその顔は本当にかわいい。今日のみのりはすっぴんだから、まるでアイドルみたいだ。ニヤニヤしていると「紗衣、キモイ」と、ひどいことを言われた。

「なんか理由考えても、どれも後づけのような気がして…。宥斗だから、好き。それが一番大きいような気がする」

言った後に、まるでのろけのような発言に、自分で自分に照れた。顔が暑い。巻いていたマフラーを外して、手でパタパタと顔を仰いでいると、みのりが言った。

「上等！っていうか、それってある意味最強じゃない？好きに大きいも小さいもないの！！それでも谷口のことが好きだって相沢に言えたのはすごいけど、それ以前に、何で幸せを感じるかなんて人それぞれだよ。だからそんなの比べることないんだよ」

「そっか…。ん。そだね。ありがと、みのり」

「でえ？相沢のことはもういいとして、谷口ともなんかあったの？」

「宥斗とは…」

そこまで話したら、ひっ込んだはずの涙がまた滲んできた。みのり

がそつと手を繋いでくれる。

「どうしようみのり…もう、宥斗に嫌われたかもしれない…」
具体的なことは何も話せないまま、私は小さい子のように泣き出してしまった。嫌われたかも、そう考えるだけで体中の力が抜けていく。

「それは、谷口にちゃんと確かめたのぉ…?」

「うん…避けられちゃって…ッ、宥斗はもう私と話も、したくないの、かも…っ。昨日、頼りにされてない…っ。宥斗が…。でもそんな状態で告白もできなくて…っ」

嗚咽が喉につかえて上手く話せない。昨日の相沢さんよりひどい。

「落ち着いてから話せばいいのに」なんて思った昨日の自分を蹴り飛ばしたくなった。

要領を得ない私の話も、みのりは「うん、うん」と頷きながら聞いてくれる。どうやらざっくり理解もしてくれたらしい。すごい読解力だ。

繋いでる手と逆の手で、背中をさすってくれる。

そして一度その手を止めると、はっきりと、強い口調でみのりが口を開いた。

「それ、紗衣の悪い癖だよっ。なんでも自分で決めちゃダメ。つとに意外に頑固な乙女ちゃんだからあ。言っちゃえばよかったのにい!!谷口にまだ、気持ち伝えてないんでしょお?ここで逃げたらダメだよっ!!このままずるずる会えないままでもいいの!？」

「…よく、ないッ」

「ほら、立ってっ」手を引つ張りあげられて、立ち上がったみのりに続いて、私も立ち上がる。私の手にはいつの間にかみのりのお気に入りのハンドタオルがあった。じっとそれを見ていると、みのりがにんまり笑ってから言った。

「特別に、紗衣に貸してあげるっ。お守りだよ！谷口に、気持ち伝えておいでっ！！」

私はその言葉に泣きながら、なんとか微笑みを返して頷いた。おまじないにお守り。なんだか魔法使いみたいだ。

「みのり…ありがとう」

「いいよあゝ。お礼は谷口に買わせるからあゝ。」

あまりにもみのりらしい返答に声を上げて笑えば、みのりも一緒に笑った。しばらく笑い合ってから、私はみのりと繋がれた手に力を込める。

また、逃げようとしていた。

考えたら悲しくなるから、考えるのをやめてしまった方が楽だと思っただ。

卑怯な弱い自分。

傷ついているのは宥斗の方なのに、去っていった背中がどうしようもなく寂しくて。だけど、もしこのまま離れてしまったら、それこそが私の一番恐れていたことなのに。

たった1日、離れていただけでこの有り様なのだから。

言わなきゃ。たとえ嫌われても、気持ちだけは伝えよう。

そして、こうして親友に支えられて立ち上がった自分。それもまた私だ。

「みのり！！アドレナリンきたっ！！」

「きたきたあゝ！？！？」

ふたりで盛大に再度笑ってから、私は手を離す。

「いってらっしゃい」

最高で最強の親友のその声に背中を押され、私は走り出した。

走って、走って、走って。

学校を出て、駅に向かう。

途中携帯で宥斗に電話してみたけれど、電源が入っていないなくて繋がらなかった。

まずは家に行ってみようと思った。後のことは、それから考えればいい。

逸る気持ちを抑えて電車に乗り込む。

宥斗が、好き。

そのことだけが、今の私を動かす原動力となっていた。

まだ怒ってるかもしれない。

もう嫌われたかもしれない。

だけど、まずは伝えたい。

宥斗、どこにいるの。

私と宥斗の自宅のある最寄り駅に着いて、再び走り出す。

景色がびゅんびゅん変わっていく。

いつもは私を和ませてくれる冬のピンと張った空気も、駅前の雑踏も、子供たちの笑い声でさえも、今の私には届かない。

それをもう一度宥斗と一緒に感じたい。

普段運動をしていない私の足はすでにガクガクしているし、心臓は張り裂けそうなほどに苦しい。口の中には喉から上がってくるような血の味がするし、真冬だというのに汗も止まらない。

だけど私は走る。何があっても変えられなかった、宝物のような恋心を抱いて。

家に着いて、まずはお揃いのマフラーを外した。暑い。そのままバツクにしまいこんでから、みのりが借してくれたお守りのハンドタオルで汗を拭う。タオルは制服のポケットにしまった。そして宥斗の家の門を開けて、小走りで玄関に近寄り、インターホンを押す。

居ない……………。

その音は空しく響き渡り、出迎える者はなかった。

通りまで出て、宥斗の行きそうな場所を考える。

考える、考える！！

何年「幼なじみ」やってるんだ！！

いろんな人を傷付けてまで、一番傍にいたんだから！！

悲鳴を上げる脳内を鼓舞して、思考を巡らせる。

宥斗の行きそうな場所。あるいは一緒によく行った場所。

小さい頃から数え切れないほど遊んだ近所の公園、卒業した途端に思い出が溢れてこっさり忍び込んだ小学校、中学校。

駅前のファッションビル。マック。カラオケ。CDショップ、レンタルDVDのお店。夏祭りの日に毎年ふたりで訪れた神社、花火の特等席。

絶好のお花見ポイントである、河原の土手。自転車を二人のりしてよく行った近所のスーパー！

季節はめっちゃくちゃに、順番もめっちゃくちゃに、次から次へと一緒に時間を過ごした場所が脳内に映像となって流れ込んでくる。

私の思い出には必ず宥斗がいる。
宥斗の居場所を探そうと蓋を開けた脳内メモリに、心の中は温かい
もので溢れていく。

それからしつかりと目を閉じて、私の一番好きな優しいあの微笑み
を思い出す。

考えるよりも先に、足が動いていた。

思い付いたその場所達を、しらみつぶしに走って回る。

自転車の方が早いけど、生憎と鍵は宥斗が持っている。ならば走る
しかない。

何度も空振りを繰り返し、その度に動きをやめようとする足を叱咤
して次の場所へ向かう。

家の近所や、学校。街の郊外で、各季節の習わしを共に過ごした自
然豊かな場所たちは一通り探し終えて駅前へと足を伸ばす。ここで
見つけられなければもう思い当たる場所はない。とは言え、駅前こ
そ宥斗の立ち寄りそうな場所はいくつもある。時間がかかることを
覚悟して足を進めれば、そこには見知った顔があった。

「矢口くんっ!!」

「紗衣ちゃん!？」

私とみのりの空気を察して、ひとりで先に帰ったはずの彼がそこに
いた。

矢口くんの家の最寄り駅はここではないはずだ。

はあはあ、と切れる息を整えて流れる汗を拭う。

ただごとじゃない様子の私に一瞬驚いた顔をして、先に口を開いた

のは矢口くんだった。

「紗衣ちゃん。宥斗を探してるの?」

「…うんっ。さっきはみのり借りちゃってごめんね。宥斗、知らない?」

まずは先ほどの非礼を詫びてから、宥斗の居場所を聞く。

「そんなの気にしなくていいんだよ。それより宥斗なら、ついさっきまで一緒に、ほんの何分か前に別れたところだよ」

「どこに行ったか知らない!?!」

思わず一步詰め寄り小さく叫ぶ。そんな私を見て、矢口くんは顔をよくしゃと歪めると、申し訳なさそうに呟いた。

「ごめん、紗衣ちゃん。そのマックで別れたから宥斗がどっちに行っただかは分からないんだ。力になれなくて、ごめん」

彼の指差した先は駅に隣接されているファーストフードだった。

候補に上がっていた場所だ。駅前から探すべきだった。

少したつてから、彼の都合も聞かずに質問を浴びせたことに気づき、再度謝罪を繰り返す。

「ううん!こっちこそごめんね!この辺りを探してみる。ありがとう!」

言って、素早くファッシュョンビルのある方へと足を向けた時。後方から声を掛けられる。

「紗衣ちゃん！」

私が振り向くと、矢口くんはいつになく真剣な眼差しをしていて、いつも笑顔の彼しか見たことのない私に緊張が走る。

「宥斗は……、」

そこまで言うてから口をつぐむ。それから、再度言葉を繋げようとしたところで押し黙ってしまった。

宥斗に何かあったのだろうか。私はその疑問をぶつけるべく口を開く。

「宥斗が、どうしたの？」

「いや……、俺が言うことじゃないな。宥斗に直接聞いて。多分、家にはまだ帰ってないと思う。」

結局望んだ答えは得られなかったが、矢口くんがそう言うなら無理に聞くのはやめようと思った。お礼を言っただけでその場を離れようとする、あのヘタレの首根っこ捕まえてやってね。あいつもすでに限界みたいだから」と言っただけで笑ってから、「本当に耐え性があるんだかないんだか、な」と付け足した。

「紗衣ちゃんのほうがよっぽど根性ある。尊敬するよ。」

そう言われても私は根性なんてものは全く持って持ち合わせていない。逃げてばかりのダメダメ人間だ。その前の言葉も気になるけど、みのりも矢口くんも宥斗のことを「ヘタレ」と言っただけでいつもからかっている。

宥斗のどの辺がヘタレなのかふたりに聞いても、明確な答えが帰ってきたことはなかった。ならば聞くだけ無駄だろう。

難しい(多分)顔をして固まっているであろう私に、「呼び止めてごめん。頑張つて！」と言つて矢口くんは手を振った。

私もそれに応えて手を振り返すと、ファッションビルを目指してまた走り出す。太陽は既に傾き始めていて、舗装された道路に私の影がうつる。冬の夕暮れは、訪れるのが早い。この影が見えなくなる前に、宥斗が会えますように。私は心の中で祈った。

結局私の探したどこにも、宥斗はいなかった。

あたりはすっかり夜が支配している。街灯がちらつき、街は昏間とは姿を変えた。

たくさんかいた汗が冷たい空気で冷やされて、体が冷たい。心なしか頭もボーっとしてきた。とにかく寒い。あんなに暑かったのに。

走り回った私のは膝は、冬の寒さで真っ赤になっていた。

もう8時だ。最近帰りの早い母がそろそろ帰ってくる時刻。きつと宥斗はまた家にはいないんだろう。

体が重い。一步步くのもやっとだった。カバンがまるで鉛のようだ。私はそのたどたどしい歩みのまま、帰路をたどる。

宥斗はどこにいるんだろう。

もうすでに腫れぼったくなっているまぶたを押さえれば、まぶたが鈍く痛んだ。

きつとんでもない顔になっているはずだ。でも別に構わない。私の家の近くは街灯が少なくてあたりは薄暗いし、周りには誰もいない。

こんな暗い道をひとりで歩くのは久しぶりだったけれど、恐怖は感じなかった。

夜中に宥斗が帰ってくるまで家の前で待ってる？

ダメだ。両親には何事かと思わるし、おばちゃんたちにも迷惑がかかる。

学校で話しかけても、無視されるのかな。

そしたらまた変な噂が流れて、学校中から白い目で見られるのか。それでも構わない。

今週が終われば冬休みに入る。三学期は自由登校になるから学校へはほとんど行くこともない。

卒業まで。卒業までに伝えなければ、もうこのまま離れることになってしまう。

明日学校で話してみよう。

なんとか家にたどり着いて、門に手をかけた。

宥斗の家の方に視線をやりながら中に入ろうとすると、今私が歩いてきた道の反対方向から、誰かが歩いて来る。

「宥斗っ！！」

宥斗はまだその声には気づいていないどころか、私の姿も確認できていないらしい。

慌ててそちらに走っていけば、ようやく私を視界に捉えた宥斗の顔が何かに怯えるように動く。

「宥斗……」

一度立ち止まった宥斗は、顔を下に向けて私から目をそらすと、そのまままた歩き出す。

あの日のように。

「待って、お願い！！」

今度はその背中が消えてしまわないように、私も必死で後を追う。

だけど、どんなに声を掛けても宥斗は止まってくれなかった。早歩きで、私との関わりを避けようとしている。

やだ。やだよ。

このまま離れることになるのはいやだ。宥斗…！

ボロボロ零れてくる涙が、頬を濡らす。もう既に嗚咽がもれそうだが息が辛い。

足がもつれる。日中走り回った私の足はもう棒のようで思う通りに動いてくれない。早く、早くと気だけが急ぐ。宥斗との距離がどんどん開いていく。

「やだあ…！ゆうつと…宥斗ッ！」

制服のポケットにあるお守りのハンドタオルを握りしめて叫ぶ。なんでもいい。かっこ悪くてもいいから、お守りに縋らせて欲しかった。最後の力を振り絞って叫んだけど、状況は変わらなかった。もうダメだ。足に力が入らない。

やっぱり私は根性なしだ。そのままその場にペタンと座りこんでうなだれる。

太ももに、頬を伝った涙が落ちる。

「ふえ…っ…う…う…う…う…う…う…」

呼吸が苦しい。吸っても吸っても、なかなか肺に息が入らない。ひゅーひゅーと、喉の鳴る音が聞こえた。

決して顔は上げないようにして、うまく機能しない自分の身体と戦う。

もう去っていく宥斗は見たくない。こんなに長く一緒にいたのに、
この瞬間が最後の記憶になるのは嫌だ…！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3881z/>

「幼なじみ」

2011年12月28日00時54分発行